[De POLA] 地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

でぽら

No. 6
'94春夏号

特集 森の再生
山村活性化への新たな試み

DePOLA No.6　でぽら●もくじ

特集 森の再生 山村活性化への新たな試み

現在、山仕事をする人は10年前の約2／3に減少し、しかも68%が50歳以上。このままだと近い将来、さらに人手不足と高齢化が進み、森林組合の運営すら危うくなる。戦後植林したスギ林の崩壊、山の荒廃や開発による河川への影響、二酸化炭素による樹木枯れ等々、いま森林や林業をとりまく状況は危機に直面している。そのため自治体や森林組合では林業労働者の雇用安定と若い人材の育成を図るため、資金的な助成や数々の施策に乗り出した。各地の動きを取材する。

■日本の森林の現状と山村活性化への検証（小沼順一）――7

女性パワーが原動力、「くりこま杉」――10

都会の二人を惹きつけた"山の仕事、山の暮らし"――13

林業こそが町の活力「サン・グリーン智頭」も発足――16

浜の母さんの森づくり 北海道根室地区漁婦連――17

（昆布の豊かな海床に/母なる川、西別川を守れ「漁協婦人の森」は地域おこしのシンボル）

「開援隊」が森林の未来を拓く（池川町）――28

近代林業のパイオニアとして「ユースフォレスター」（梼原町）――30

●カラールポ

•若い林業の担い手を育てる 兵庫県立「山の学校」――3

•20年目を迎えた「草刈り十字軍」――22

•山の恵みを活かす 紀州の森の特産品「備長炭」――35

■でぽら・エッセイ

森の心に耳を傾けてごらん/高橋延清――25

■都市からふるさとへのメッセージ

パートナーシップの時代へ/三菱総合研究所――32

INFORMATION――39

•森林公園&施設ガイド/林業労働力育成センター他

●表紙／初夏を迎えた白馬岳と犀川 長野県小谷村（カメラ/小林恵）

•上は「草刈り十字軍」参加者がかぶるヘルメット

「でぽら」（DePOLA）とは――

Depopulated Local Authorities（人口が少ない地域）、つまり過疎地域の意味。わが国の過疎市町村は37%にも達しています。貴重な自然環境と農産物の供給地であり、日本の伝統文化や風土を伝承してきた農山村の活性化と発展をめざすための交流誌として『でぽら』をお届けいたします。回覧し、多数の方にご高覧いただければ幸いです。

若い林業の担い手を育てる

兵庫県立「山の学校」

カラールポ

ツリーモンキーの操作を真剣に見守る生徒たち。

平成5年12月末、全国の自治体で初めて開校した兵庫県立「山の学校」では、一年間の体験学習を修了した一期生18名が無事巣立っていった。ナタもカマも使ったことがない生徒たちだったが、豊かな自然の中で、共同生活や森林の保全と育成の大切さを学び、一まわりも二まわりも大きくたくましくなった。生徒の大半が「これからも森林に関わる仕事に従事していきたい」と語っている。

枝打ちロボットによる林業実習

11月のある日、林業実習に同行するため、朝早く「山の学校」を訪ねた。

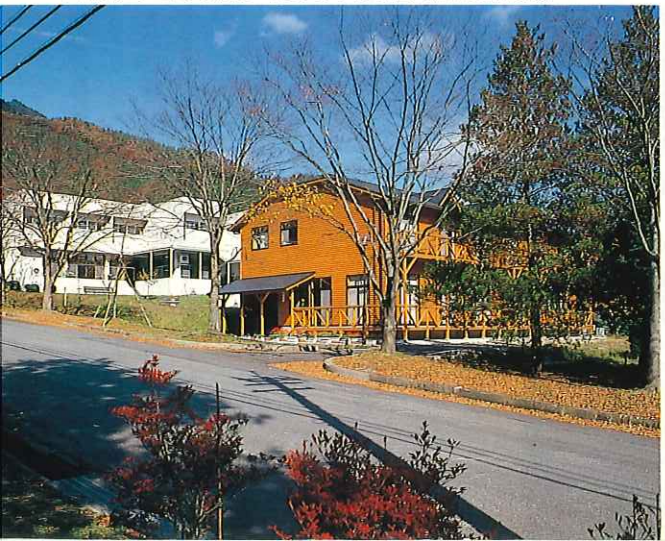
場所は兵庫県山崎町にある林業試験場内。9・9haという広大な敷地内に県立林業研修館があり、4月には隣接してログハウス風の木造二階建て校舎（延450㎡）が完成、寮・研修室に使われている。

林業試験場内は、日本古来からの樹木の他に、珍しい外国の植物も沢山植樹されており、紅葉がひときわ美しい。

午前9時、朝食を終え仕業服に着替えた生徒たちが姿を見せた。先生も生徒も、カジュアルウェアとして人気のカッコいい制服を着ている。

教室で朝礼・学級会を開いたあとマイクロバスに乗り込む。バスには「FOREST SCHOOL of NATURAL STUDIES」と書かれてある。途中兵庫県造林緑化公社の職員のクルマと合流して、約40分ほど走って夢前町の山林にたどり着いた。

兵庫県立「山の学校」。下がログハウス風の宿舎&研修棟。



山の実習に行く前に教室に集合して、村上先生より説明を聞く。

先生も生徒も専用のマイクロバスに乗って実習現場へ。

早速、各人がナタ、ノコギリを腰につけて、山作業の服装に。

車を降りると、各人がナタとノコギリを腰につける。徒歩約5分ほどで、作業予定地のヒノキ林に到着。早速整列して、村上嘉宏先生（元林業試験場長）と造林緑化公社の指導員から説明を受ける。

この日の実習は、枝打ちロボット・ツリーモンキーを使っての枝打ち。この機械はリモコン操作で、ロボットが幹をスルスルと上下し枯枝を次々と打ちはらっていくスグレモノ。指導員の実演のあと三班に分かれて生徒たちも実習。リモコンには慣れているせいか覚えは早い。ただ、ロボットを次の木に移動するのには体力とコツが必要で、また曲った木には使えないのが欠点とか。一台40万円するので林業農家が個人では購入しにくいが、森林組合ではかなり普及しはじめている。

昭和37年に植林し、一度は間伐、枝打ちしてあるため真すぐ伸びているヒノキだが、上の方は枯枝をいっぱいつけている。これを取り除くと木はサッパリとリフレッシュし、たちまち陽ざしを受けて明るく変身していく。

12時から一時間昼食タイム。道端や河原、近くの栗林などで好きな仲間と集い寮母さんの作ったボリュームたっぷりの弁当をひろげる。

「将来も林業で働きたい」と生徒たち

「山の学校」の生徒は兵庫県在住の15歳から20歳までの男子18名（定員20名）。県では平成4年秋から自然が好きで林業に関心のある青少年を募集した。県内外から100件を超す問い合わせがあり、22人の応募者があった。その中から書類選考をし、二泊三日の経験入学を経て18名が一期生に採用された。

修学期間は一年間で全寮制。生活費用などの実費として月5万円を負担するが、授業料は無料。

講師陣は「山の学校」のスタッフ（職員）8名の他に、林業関係者、生物学者、レクリエーション指導員、民俗学者、陶芸家など多彩で、野外での体験学習を中

3班に分れて、ツリーモンキーを操作する。機械に強い若者らしく覚えは早い。

心に独自のカリキュラムを組んでいる。

生徒は、中学卒が6名、高校卒が12名で、会社勤めを辞めて入学した人もいる。

最年少組の谷安章君（15）は、この近くに実家があり、中学を出て4月に入学した。

「自然が好きで入学したが、7カ月研修してみて山の仕事に関心がでてきたので、これからも林業に関係のある仕事をしたい」と言う。

森下宣明君（20）は神戸市出身。高校卒後大学をめざして一浪中だったが、「山の学校の募集を知り、迷わず応募しました。自然には興味があり、これからも続けていきたい」と語る。

山田大輔君（20）は城崎出身で、登山が好き。高校卒後は山小屋で働いていた。「この仕事は将来もぜひやってみたいが、あと一年ほどは山小屋へ戻るつもり。林業というと暗いイメージを抱いていたが、来てみたら結構機械化していて新しい職場なので驚いた」

彼の場合は、父親が「好きなことをしろ」と積極的に入学をすすめてくれたという。

入学には本人の希望もあるが、親が「一年間親元を離れて自立し、共同生活をしながら自然を大切にする心や労働の尊さを学ばせたい」と入学を望むケースも多かった。

他には、「遊びに来たつもりだったが興味が湧いたので森林作業員になりたい」（井上君・16歳）、「大阪生まれの神戸育ちだけど、自然を相手に生活できるなら山の仕事につきたい」（武田君・20歳）「いまここで将来を決めるなんていやだよ」（橋本君・20歳）という意見もあった。

村上先生は「応募してきた生徒はみな山や自然が好きで入学してきました。しかし、自然が好きというのと林業が好きというのとは違います。林業に関心と理解を持ち、後継者になっていってもらいたいというのが我々の願いです。

とはいっても山の学校は技術者養成学校ではないので、各人の個性や創造性を活かしながら、共同生活や自主性を身につけ、絵画や書道、一般教養も学んでいくという柔軟な授業内容を採用しています。お手本にするものがないので、僕ら

リモコンでツリーモンキーを操作する生徒たち。

↑山の学校・研修棟。
→楽しい昼食。調理師の作ったボリュームたっぷりの弁当を陽だまりの道端で食べる。

の方がこれでいいのかと悩みながら教えてきた一年間でした」と語る。

同校を訪ねてみて、先生達の輝いている姿も印象的だった。

森本悦生校長は、一昨年まで小学校長を勤めた。山村留学で都会っ子を受け入れ牛の出産の立ち会いや自然とのふれあいによる教育を実践した経験を持つ。

「いま山を守り育てることがとても大切。そのためには人を育てなければ。高齢化が進んでいる林業界に新風を吹き込みたい」と語る。

市橋敬典副校長は「現在の教科書中心の学習ではなく、体験を通じて山や自然の中で生きる喜びを育んでいきたい」と語り、個性的なカリキュラムづくりに力を入れた。

職員(スタッフ)もみな若い。

森本校長

元高校の国語教師だった濱田先生は「山の作業は初めての体験だが、何しろ楽しく、自分自身が大変いい勉強をさせてもらっている」と語っていた。青少年指導員を担当している。

同校の玄関先きには生徒が育てたという見事な菊花の盆栽が並んでいた。町の盆栽展で数々の賞を受賞したという。若い人でもその気になればやれるんだと改めて感心した。

なお「山の学校」は本年度より4月入学、3月卒業に変更され、すでに多数の問い合わせや応募がある。また、研修棟では夏休みに県主催で一般人を対象にした三泊四日の「緑の体験隊教室」も実施している。

●兵庫県立「山の学校」／兵庫県宍粟郡山崎町五十波☎0790(62)8088

「グリーンインパルス」(緑の推進隊)を県下森林組合に配置

県立「山の学校」の開校と関連して、兵庫県では今年4月から、「グリーンインパルス(緑の推進隊)」制度を発足する。

これは、月給制で働く森林労働者で組織する技術者集団で、隊員は統一したユニホームやエンブレムを着用、緑の推進員としてイメージアップをはかると共に通常の林業作業の他に、森林の保全管理や、登山道・標識の修理、森林パトロールなどの作業に従事する。また県民の意識啓発をするため、森林ガイドや林業体験活動を行っていく。

兵庫県の森林労働者は、10年前は約3600人だったが、平成4年には2136人に減少、しかもこれらの作業員は50歳以上が86%を占め、高齢化がすすんでいる。

森林労働者の減少と高齢化に歯止めをかけるためには、新規参入者を積極的に受け入れる体制づくりと、「山の学校」のような若い人材の育成が急務となる。

そのためすでに平成5年より森林作業班員の月給制導入の足がかりとなる助成制度(雇用や健康保険、年金などの掛金として年間一人40万円を森林組合に助成する)をスタートさせている。

月給制作業班の採用は、県下29森林組合のうち16組合が行っているが、人数はまだ約70人と少ない。

「グリーンインパルス」には月給制で働くすべての人がメンバーになり、初年度は揖保川流域を重点地区としてパトロールしていく予定だという。

平成8年度までには400人の隊員を確保することを目標にしており、「山の学校」を修了した若者たちも本人が希望すれば当然メンバーとして加えられ、若い森林技術者が誕生することになる。この他に、隊員の中から地域林業のリーダーにふさわしい人を「兵庫県林業士」として認定する制度を検討している。

(撮影／藤田良雄　文／浅井登美子)

日本の森林の現状と山村活性化への検証

小沼順一（森林総合研究所次長）

世界3位の森林国だが――日本の森林の現状

我が国の森林面積は約2、520万haで国土の67%を占め、フィンランド、スウェーデンに次ぐ世界第3位の森林国です。温帯を中心に北の亜寒帯から南の亜熱帯まで森林が分布し、降水量が多く、樹立の育成に恵まれた環境にありますが、同時にササやつるなどの植物の繁茂もしやすく、病虫害の発生も多いという環境にあります。これは、森林を保全し、健全な林業経営を維持していくには、森林の状況に応じて、植付けや下刈、つるきり、間伐、薬剤散布などの手入れが必要であることにほかなりません。

森林総面積のうち、54%の1、350万haが天然林、41%の1、030万haが人手で植えた人工林で、残りが竹林（0・6%）と無立木地（5%）です。

人工林の大部分はスギやヒノキ、カラマツなど成長のよい木が植えられていますが、その約8割は下刈や間伐の必要な35年以下の若齢林です。

我が国の木材需要量は平成3年の統計で約1億1200万m³です。建築用や紙・板紙のほか、家具・建具用、杭丸太や足場丸太などの土木建築用、木箱・梱包用、車両・船舶用、その他日用品などとして使われており、国民1人当り年間約1m³の木材を消費していることになります。このうち国産材の占める割合は25%の約2、800万m³に過ぎません。残りの約8、400万m³は、米国、カナダ、東南アジア、ロシア、ニュージーランドなどから輸入される外材によってまかなわれています。

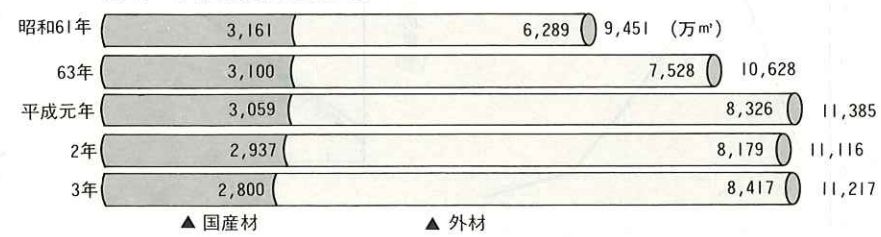
図-1で示すように、木材の自給率は年々低下しています。31億3000万m³の蓄積量を有し、年間約1億m³の成長を続ける森林を持ちながら、我が国の木材生産量は年々減少しているのです。

何故国内資源が活用できないのか、理由はいろいろありますが、一口に言ってお米と同じように外国産の方が安いからです。

林業者は50歳以上が7割――きびしい山村の現状

林業に携わる林家の数は全国で251万戸ですが、このうち山林面積が5ha未満の零細な林家が89%を占めています。また、不在村者が持っている森林の面積も年々増えつつあります。山村の過疎化が叫ばれて久しいのですが、林業の場で働く林業労働者の数も、林業の生産活動の停滞を反映して、ここ30年間減少傾向を続けており、あわせて高齢化も進んでいます。平成2年の林業就業者中に占める50歳以上の方々の割合は67・9%にも達しています。

図-1　木材の供給量の推移（平4林業白書）



このような林業労働の減少と高齢化の進行は、今後、適正な森林の管理を行い、国産材の供給態勢を整備していく上で深刻な影響を及ぼすものと心配されています。

全国に1、642ある森林組合（平成3年末）は森林所有者の共同組織であり、組合員に対する森林経営の指導や受託や林産物の販売などの事業を行っていますが、最近は不在村者に対する指導なども増えています。森林組合の事業を担うのは作業班の人達ですが、ここにも人員の減少や高齢化の波が押し寄せており、合併などによる森林組合の経営体質の強化が望まれるところです。

また、民有林からの丸太の生産や、製材工場への丸太の供給などを担当しているのが素材生産業者です。ここ数年来、林家の伐り控え傾向などにより伐採量が減少して、安定的に事業を継続することが困難となっており、これまた協業化などによる事業体の体質強化が必要となっています。

〝緑のダム〟ブナの森

森って素晴しい
森林の持つ機能の大切さ

森林は人間の生活に不可欠の木材のほか、きのこ類、クリ・クルミなどの樹実、わさび、たけのこ、生ウルシ、竹材、木ろうなどの林産物を供給するという大切な働き（機能）を持っていますが、この外にも人間の生活を豊かに、安全で快適なものにするために重要な役割を演じているのです。

まず第一には、二酸化炭素を吸収し固定するという機能です。

近年、地球人口の増加と人間の経済活動の活発化にともなって化石燃料が大量に使用されるようになり、大気中の二酸化炭素の濃度が上昇し、地球温暖化が心配されています。樹木は根から水を吸い上げ、葉から二酸化炭素を吸収して、太陽の光の下でセルロースなどの炭水化物を光合成します。その際大気中に酸素を放出し、炭素を炭水化物の形で固定していきます。このように森林は大きな大気浄化装置なのです。

第二の機能は、降った雨や雪を一次的に貯えて、少しずつ下流へ流しながら水質を浄化する働きです。これを水質源かん養機能と呼んでいます。

森林上に降った雨水のうち、一部は樹木で遮断されそのまま蒸発し、大部分は地表に達します。地表に達した水は土壌中に浸み込んだり、地表を流れて次第に沢や川に集ります。地中に浸透した水の一部は樹木などの根から吸収され、また一部は地下水となります。もし山腹が木などの植物に被われていないと、雨水は地表を直撃し、一気に地表を流れて洪水などを引き起こす原因となります。

図-2は、森林に降った雨の量と、そのうち樹冠に付着してそのまま蒸発する量との関係を樹種別に示したものです。ブナやスギ、ヒノキが遮断の効果が高いことがわかります。森林は、静かに大量の水を貯え、水を浄化する役割を果たしているのです。これが森林を、〝緑のダム〟と呼ぶ由縁なのです。

第三は、山地からの土砂の崩壊や流出を防止して国土を守る機能です。

山腹の崩壊は表面浸食から山崩れ、地滑りへと規模を拡大していきます。山崩れや地滑りは雨水などによる大量の浸透水により、地層などのずれに対する抵抗力が著しく弱まって引き起こされるのです。林木や地表植物、落葉などが地上に存在することによって、流水の量と速度が制御され、土壌の浸食は抑えられます。さらに地中に延びた木や草の根は土の粒子を結び付ける働きを持っており、土の崩れを防ぎます。

大規模な土石流や洪水の発生は、上流地域の林地の荒廃に起因するケースが多いのです。

図-3は、木を伐採した後、年月の経過とともに山崩れがどのように起きるかを調査した

図-2　樹冠遮断量の樹種間の比較（服部）

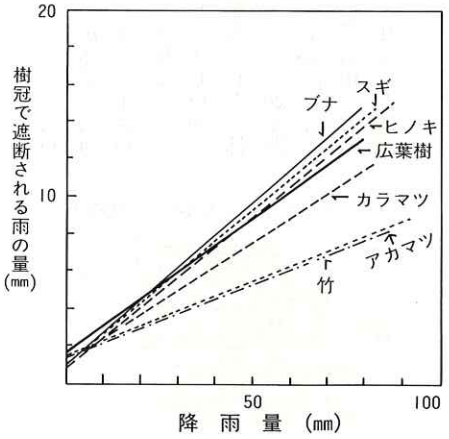
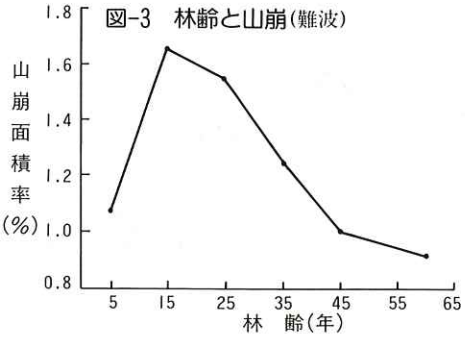


図-3　林齢と山崩（難波）



一例です。伐採された木の根の抵抗力が残っている5年間ほどは崩れが少ないのですが、15年目頃は一番多くなって、その後は森林の成長とともに山崩れが少なくなることを示しています。

第四は、野性鳥獣を保護する機能です。森林は野性動植物のすみかであり、多種多様な生物の宝庫です。そこに生息する昆虫や鳥や微生物なども、森林と互いに係わり合いをもちながら、繁殖や成長を続けているのです。

また、人間も森林レクリエーションなどを通じていろいろな生物とふれあい、精神的な安定を得ることができます。森の中を歩いていると木の葉や幹の香りにすがすがしさを感じ、気も晴れ晴れとなることがあります。これは植物から放出されるテルペンを主成分とする化学物質によるもので、これをフィトンチッドと呼んでいます。このフィトンチッドは人間の精神的健康面に大変有効な成分で、森の中を散策し、きれいな空気を胸いっぱい吸い込むことによって、鋭気を養うことができます。これが森林浴です。このように私たちに素晴らしい景色やフィトンチッドを提供し、人間の保健を増進し、心身の休養に役立つ働きを森林の保健休養機能といいます。

このほか気象緩和、飛砂防止、防音、防火などの生活環境保全機能や、遺伝資源の保存などの機能も持っています。参考までに森林の持つ気温緩和の働きと防風林による風速緩和の効果に関する調査結果の一例をそれぞれ図-4と図-5に示します。

以上のような酸素供給・大気浄化、水資源かん養、土砂流出防止、土砂崩壊防止、野生鳥獣保護、保健休養など人間生活と係わりの深い森林の働きを森林の公益機能と呼んでいますが、我が国の森林の公益的機能を貨幣価値に換算すると年間約39兆円にも達するといわれています。これは国の一般会計予算の54%に相当する額です。もしも日本に森林がなくなれば、私達は砂漠化した国土の上で緑のない乾枯らびた生活を強いられ、その上余分に毎年これだけの経費を負担しなければならなくなるのです。

林業を魅力あるものに 山村の活性化を図るには

人間にとって重要な役割を果たす森林を守り育てる人達が住む山村には、平野周辺部から山岳地までの間のいわゆる中山間地に存在し、まとまった平地も少なく、道路や上下水道などの生活環境施設の整備も立ちおくれ、収入の道も限られるなど生活条件には必ずしも恵まれていません。そのうえ山村地域の活性化を担当すべき町や村の財政基盤も弱く、人口も若年層を中心に減少しており、過疎化と高齢化が進行しています。

山村に活力を取り戻すためには、まず林業を魅力ある産業にしなければなりません。近代的な林業経営の基盤となる林道を十分に開設し、若い人達にも魅力ある林業機械を導入して山仕事の厳しさと危険性を解消し、作業コストを引き下げて林業の収益性を高め、山で働く人々の収入の安定化を図らなければなりません。このためには国や県などによる財政的な後押しが必要になるでしょう。その額は多分、39兆円に比べればわずかなものです。また、これらと併せ、健康で文化的な生活を送るためにどうしても必要な病院や診療所、学校や保育園、文化施設などを整備し、若い人達が落ち着いて生活できるような豊かな生活環境を造り上げる必要があります。

一方、林業に携わる人達は、地域の林業の経営方針についてお互いによく相談し、特色ある林業のビジョンを考え、それに向かって地域ぐるみで山造りをすることが大切です。

併せて都会から安らぎを求めて訪れる人達を受け入れる施設やイベントなどを準備して、山村の人達と都会の人達の交流を深めるといいでしょう。都会の人達に森林浴を楽しんでもらったり、時には、レクリエーションを兼ねて山仕事にも参加してもらうような企画を考えてはいかがでしょう。

このためにはもちろん、県や市町村の応分の支援と指導が必要です。

図-4　照葉樹林(タブ林)内外の気温の日変化
(三寺)

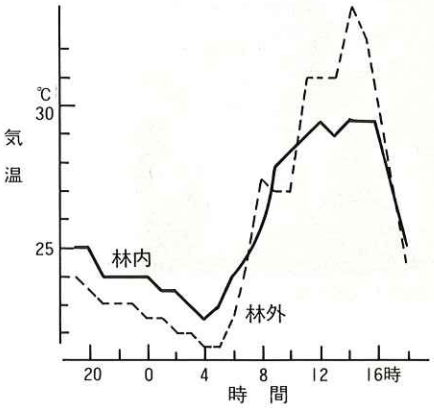
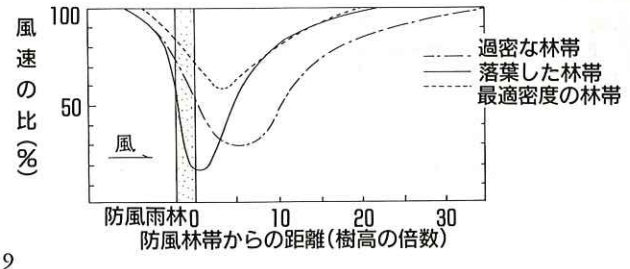


図-5　幅の狭い林帯の風速減少作用(地上1m付近)(樫山)



森の再生
山村活性化への新たな試み

●日本列島を飛行機の上から眺めると、緑におおわれた、この弓形の島が豊かな山国であることに、改めて気付かされる。

その山国を支える林業の人口は、もう十数年も前から激減の一方であるという。

「何しろ3Kだからね」などと、林業関係者自らが言ってしまうその仕事は、果たして、そんなに汚く、キツく、危険なのだろうか。

そんな疑問を真向から覆してくれたのが、宮城県鶯沢町の「くりこま杉協同組合」だった。広大な敷地の中を、若い女性の運転するフォークリフトが、丸太を積んで颯爽と走っていく。平均年齢27歳。38名の職員のうち、20名を女性が占めるというこの製材工場は、いま、地域で最も人気の、若者たちの職場となった。

こんな作業も女性軍が軽々とこなす。

ツイン台車のオペレーター
佐藤美香さんは21歳。

女性パワーが原動力
「くりこま杉」は、若者に人気の職場

宮城県は県面積の約6割を森林が占めている。その半分が戦後に造られた人工林だ。21世紀初頭には本格的な伐採の時期を迎えようという生産力をもちながら、しかし、県内の林業人口はここ数年減る一方だった。

「くりこま杉協同組合」はそうした折、林野庁の国産林産地整備体制事業の一環として、平成2年、県北西部栗原地域の木材・製材業8社によって設立された。

行動派の大場理事長。

圧倒的な後継者不足といわれる中、ここでは現在、38名もの若い男女が働いている。特にそのうちの20名が女性だということが、この工場の大きな特徴といえるだろう。

「とにかく、これまでの林業の現場には見られなかった沢山の新しい試みを取り込んでのスタートでした」

と、代表理事の大場武雄さんが言う。

全員ではないけれど、ユニホーム姿で勢揃い。

確かに、かつての製材工場のイメージはここにはない。

栗駒国定公園を背後に控えた、静かな山あいの一角に広がる工場は、敷地3万3000立方メートル。その広々とした台地に、みちのくの大きな空が果てしなく続いている。

杉の丸太が山積みされた原木ストックヤードと呼ばれる構内を進んでいくと、正面に建つペンションのようなモダンな建物が目に入る。これが工場全体の中枢部とも言える管理棟だ。この裏手には、鉄骨造りの製造加工工場、製品管理センター、自然乾燥保管倉庫などが、広い敷地内にゆったりと並ぶ。

原木を積んだフォークリフトが、勢いよく構内を横切っていく。運転しているのは、長い髪をなびかせた若い女性。メジャーを出して、山積みされた原木の寸法を計っているのも女性たちだ。

製材工場では全てライン化された最新鋭の機械を、女性職員がオペレーター室から操作する。入社3年目の佐藤美香さん（21歳）は「ツイン台車」と呼ばれる機械のオペレーターだ。

「こんな機械がなかった頃は、親方について7年位かかって覚えた作業だそうです」

と、あどけない顔で笑う。

「リングパーカー」という、木の皮をむくラインのオペレーター・菅原裕美さん（21歳）も入社3年目。一日に1500本の丸太の皮をむくという。

女性の身で、製材工場で働くことに、家族の反対はなかったのだろうか。菅原さんに尋ねてみると、

「全然なかったですね。ウチは母もここで働いているんですよ」

と、屈託のない笑顔が返ってきた。

工場内は寒い冬も暖房完備。木材のクズを燃やしてスチームにし、天井のパイプに通すというシステムで、常に快適な温度が保たれている。

「冷暖房完備の製材所なんて、まず無かったですからね」

と、大場理事長が胸を張る設備である。実際、この設備に惹かれて応募してくる若者も多いという。快適な環境を整えることは、今や、労働力の確保の絶対条件だと大場理事長はいう。

工場全体の中枢部でもある管理棟は、全てOA化されていて、加工工場のコンピュータとオンラインで繋っている。この思い切ったコンピュータの導入により、作業はまさに女性でもできるほどラクになり、効率も数段アップしたという。

待遇も仕事も、男女平等が基本

製材所という、男性の領域だった現場に、これだけ多くの若い女性が働いている。それはやはり、目をみはる光

工場内は暖房完備で快適。

モダンな管理棟はペンションのようだ。

景である。どんなキッカケで女性たちが集ってきたのだろう。大場理事長に訊いてみた。

「特に女性に的をしぼって、職員募集をしたわけではないんです。ただ、コンピュータの導入による仕事の快適さと、冷暖房完備等の設備をアピールするために、〝女性でも働ける製材所〟という言い方をしたんです。そうしたら若い女性がこんなに集って、そして、世の中よくしたもので、そうなると若い男性の応募も毎年増えてくるんですよ」

新卒初任給16万円。社会保障完備。給与に一切の男女差別はなく、〝お茶当番〟や掃除も、男女がペアを組み、交代制で行う。シャワー室やカラオケルームも備ったこの快適な職場は、確かに若い男女にとって、充分な魅力のある就職先といえるだろう。

昼休みには、管理棟1階の広々とした食堂が、若者たちの弾むような声でいっぱいになる。彼らの表情からは、地域の産業を背負っているといった気負いも、ましてや〝3K〟などといわれる暗いイメージなどは、全く感じられない。街を歩けばどこにでもいそうな現代っ子の姿そのものの彼らである。

この「くりこま杉協同組合」では、毎年平均3名程を新規に採用している。そして、採用するのは、常に未経験者だけだ。

「それはね、地域を守るためなんです。経験者を採るとなると、ウチはラクだし給与もいいから、他の製材所の連中がみんなここへ来てしまうでしょう。それでは何にもならないわけで、林業の町として、地域全体がよくならなければ、やっぱりダメなんです」

と大場理事長。

実際には林業につきまとう〝3K〟イメージは未だに根強く、山仕事にも製材所にもなかなか人は集らない。山仕事の多くは、いわゆる〝一人親方〟という個人雇用で、例え日給1万2000円貰えても、一切の保障はなく、実質的には町工場で働く日給4000円の女のコと、変わらないことになる。

製材所にしても、その多くが個人の零細企業で、輸入材の激しい攻撃の中、労働力確保すらままならないというのが現状のようだ。

「農業の後継者がいないといわれていますが、それよりももっと深刻で、遅れているのが林業なんです。林野庁あたりも、この辺りで発想を切り換えて、補助金などもどんどん出して、若者たちを育てていかないと、日本の林業は本当にダメになりますよ」

山にはしっかりとした林道を通し、水洗トイレをつける。働く人が働きやすい環境を整えてあげるというそんな当然のことが、全く無視されているのが林業の現状だと、大場理事長は言う。

そして、林道をつけたり、木を伐ったりという行為そのものを、反自然保護だと短絡的に結びつけるマスコミや自然保護団体へも、林業という営みを、きちんと正しく理解して欲しいと、訴える。

山は標高に応じて、ブナ原生林などの保護すべき樹木帯と、植林して木を育てる生活林とがあることを、私たちは改めて理解するべきだろう。その植林の山も、最近では自然の災害などを考慮して、杉ばかりを植えるのではなく、広葉樹との混合林にしていこうという試みも増えてきた。

さまざまな試行錯誤の中で、安い輸入材に負けない、日本の風土に合った建築材の需要を伸ばそうと、新たな模索も始まっている。

山国に住む我々にとって、山をどう活かし、山にどう生かされるかは〝永遠〟の課題であるのかも知れない。

「くりこま杉協同組合」のこの思い切った試みが、過疎化に向かっていた栗原地域のみならず、林業全体に大きな刺激と活力を与えたことは、言うまでもない。

右上／丸太の原木の寸法取りは結構コツがいる。
右下／刃物の目立てだけは男性の仕事。

都会の二人を惹きつけた山の仕事、山の暮らし

宮城県七ケ宿町

●都会の暮らしに見切りをつけて、田舎暮らしを始める人が増えてきた。農業や陶芸などと、それぞれの生計の道はさまざまだ。

東京から宮城県七ケ宿町へ移り住んだ小山さん夫妻が選んだ仕事は林業だった。昔から山が好きだったという二人にとって、それはごく自然の選択だったという。

木を伐り、木を植え、山を育てる。山仕事の面白さがだんだん分かるようになってきて、今、毎日がとても楽しいと、二人は意欲的だ。

宮城県七ケ宿町は蔵王連峰の南麓、山形と福島の県境いに近い小さな山あいの町だ。短かった秋が終り、裾野に紅葉を残した蔵王の山々は、頂きをすでに真白に染めて美しい初冬の姿を見せていた。

東北自動車道の白石インターから国道の山道を20分程西へ進むと、七ケ宿町役場のある町の中心部へ出る。その少し先に見えてきたのが「古河林業七ケ宿営業所」という看板だ。ここが小山夫妻の勤める「古河林業」の事務所であり、隣に立つ社宅が小山夫妻の住まいと聞いてきた。

中から出てきたのは、いかにも若々しい笑顔の小山百合子さん（29歳）だった。彼女の案内でご主人真光さん（29歳）の働く山の現場へと向かう。

国道の両側には山間のわずかな平地を利用した稲田が、夏の冷害の打撃を受けたのだろうか、寒々とした姿をみせて広がっていた。地域の90%が山林というこの町にとって、米づくりできる田んぼは、わずかでも貴重なものだったことだろう。

杉の植林された山道を進むと、木々の間からチェーンソーの音が響いてきた。明るい斜面で伐採作業が行われていた。

小山さんは他の作業員の人たちと揃いの赤いヘルメットをかぶり、森林作業員の服装も、その仕事ぶりもすっかり板についたという感じで、チェーンソーを握っていた。今日は朝から、50年近く経つ伐採期を迎えた杉の切り出しをはじめているのだという。

首に巻いた赤いバンダナがよく似合っている。

「性に合っているんですよ、この仕事。やった仕事がすぐに見えるでしょう。伐った木をひっくり返して、うまく伐れたかどうか、一喜一憂したりして。ボクぐらいのキャリアだと、まだそんな事すら不安定ですから。植えた木が育っていくのを見るのも楽しいですしね」

古河林業に就職しておよそ一年という小山さんは、今はまだ勉強すること

「両親にはよく反対されなかったねエ」「山が好きだったから、あきらめてたのよ」と笑う小山さん夫妻。

一息入れる、楽しい時間。

この七ケ宿へ来る前は、同じ宮城県の栗駒山麓で、キノコ栽培をやっている知人の仕事を手伝っていた。それでもやはり山の仕事がしたくて、山仕事の親方を紹介してもらい、そこで3年間働いた。

七ケ宿へ来たのは、「前のところでの待遇面に問題がありました。親方は悪い人ではないんだけど……」と、小山さんは以前の親方を気づかいながら、言葉少なに語った。

山では、まだまだ親方といわれる個人の請負師のもとで働くケースが多く、特に山奥の方では、未だに昔の庄屋と小作人のような主従関係が残っているという。

今、山の作業は日当7、000円前後が相場。社会保障制度は一切なく、15人程度が働いていても所得税の源泉徴収すらやってくれないのが現状だと、小山さんは残念そうに話す。

「これでは後継者が育たない」という彼の呟きは、親方の耳にどう響いたか。

大反響があった全国誌での募集広告

現在、小山さんは古河林業に正社員として就職している。妻の百合子さんもパートで、隣接する古河林業の事務所を手伝っている。ここでは厚生年金などの社会保障がきちんとついて、月給20万円。

ばかり、と謙遜する。

もともとは神奈川県川崎市の出身。妻の百合子さんは埼玉県生まれという都会っ子の二人である。その二人が、どうしてこんな山奥での暮らしを選んだのだろうか。

「山が好きだった」という二人だが、そもそも小山さんは東京農大の林学科の出身。卒業当時、林業関係の求人はどこもなく、やむなくリゾート関連の企業に就職したという。

すでに東京を脱出して長野県車山高原のスキー場本社で働いていた百合子さんと、仕事の上で知り合い、意気投合。二人は迷うことなく山の暮らしを選んだのだという。

「森林林業士」を都市から募集
和歌山県龍神村

龍神村は人口約5000人。村の四方が山に囲まれ、山林率は75%。森林育成や材木の生産・加工工場の協業化、保全等の近代化に力を入れているが、林業作業員の不足と高齢化が悩みの種だった。そのため平成4年には就職情報誌や「田舎暮らしの本」等に作業員の募集記事を出し、17名と面接、4人を採用した。また昨年5月には大阪市内で開催した大学卒業予定者を対象にした企業セミナーに参加、「山で働きませんか」と呼びかけ、7月までに5人の採用が内定した。

給与を月給制にする、作業班員の名称を「森林林業士」とし、必要な資格や技術習得を助成する。また住宅の提供（現在一戸建住宅7棟新築）等が人気を呼び、応募者は20倍に達している。

大卒者や転職者を採用
静岡県天龍市・龍山村

静岡県天龍市森林組合では、5年前より大卒者の募集を行い、昨年からは転職希望者の採用にも踏み切った。給与制で土・日曜日は休み、独身寮や住宅も斡旋。仕事は山仕事の他に製材や木工品作りなどもある。

昨年4月には信州大学農学部林業科卒の石川量子さん（23）も入社、「外で体を動かすことが好き。自然相手のこの仕事に満足している」と言う。

組合では、市内の若者やUターン者をアテにせず、外部からの意欲のある人を今後採用していきたいと語る。

〝天龍美林〟で知られる龍山村は、全国で最も早い時期に、森林作業員を都市から募集した村で、現在約30人が入村している。独身アパート、村営住宅があり、若者定住に役立っている。

資格取得に半額補助他
北海道森連／北海道庁

北海道では、林業関係者が必要な資格・技術を取得する場合、費用の二分の一を補助することになり、平成5年度は90人を対象に募集した。

補助の対象となる資格は、①地山掘削主任②はい作業主任③フォーク運転④車両系建設機械運転⑤玉掛け⑥小型クレーン操作など。受講料の他、交通費やその間に組合が支払った賃金も含めて半額を支給。ただし40歳未満で、資格、免許が取得できた人であること。

一方北海道庁林業振興課では、平成5年より高校生、大学生を対象に「グリーントレーニング体験学習」事業を開催している。一回の実習期間は一週間で、実施町村の公共施設や農家に泊って共同生活をしながら山仕事の基本を学ぶ。毎年道内の二市町村で開催していく予定で、費用は市町村が負担。

平成5年には、下川町と津別町で行い、下川町では10人、津別町では15名の高校生、大学生が参加した。6年には美幌町、浦幌町で開催する予定。

住まいは古河林業の社宅で、庭つきの快適な一戸建てを、家賃1、000円で借りている。

「基本的な生活の保障さえしてくれれば、山で働きたい若者はいくらでもいると思いますよ」と小山さんはいう。

林業を活性化させるために一番必要なのは人を育てること。そのためには働く人の住環境を整えることが、まず先決だと彼はいう。さらには「林業構造改善資金」などの使い方にも、もっと工夫が必要ではないかという考えだ。

「スキー場を作って雇用機会を増やそうというやり方は、既存の住民が他へ出ていかないようにという考え方ですが、新しい人を広い範囲から雇おうという視点がもっとあってもいいと思います。林業の事業体の経営者は、全国誌を使うなどして、人の募集に予算をもっとかけるべきではないでしょうか」

今、都会には潜在的に、山で働きたい人などは沢山いるといわれている。それは、小山さんもモデルとして一役買った「全国森林協同組合」の、求人広告の結果が物語っている。リクルートの「B-ing」という求人誌に載せたその広告は、全国に向けて森林作業員を募集したものだった。結果は予想もしなかった大反響で、都会からの問い合わせが相次いだという。

「山仕事の人たちは、〝3K、3K〟って言いますけど、仕事自体はそんなにキツいもんじゃないし、残業もなく5時にはちゃんと終わりますからね。都会のサラリーマンのようなストレスもないし、暮らしとしてはずっと快適ですよ」と、小山さん。

そんな角度から林業を、社会全体にアピールしていくことを、彼は提案する。その一方で地域の子供たちがもっともっと山に入り、山と親しむことの必要性も感じている。

都会に生まれ、山を慕い続けてきた彼だからこそ、林業への思いは熱く、真剣な姿勢が感じられる。彼の若々しい発想や積極性が、これからの仕事にどう活かされていくのか、大いに期待したい。

古河林業では、チェーンソーを持って働くだけが仕事ではない、というポリシーを持ち、能力次第では1、200町歩あるという山全体の管理にも、若い社員をどんどん参画させている。小山さんが大いに触発され、仕事に常に前向きで取り組めるのは、きっとそんな目標があるからだろう。

二人の暮らす2DKの社宅で、作りかけだという、きれいなリースを見つけた。山ぶどうのツルとセイタカアワダチソウで、やっとここまで作ったという、妻の百合子さんのステキな〝作品〟だ。

「ホントは、事務所のデスクワークなんかじゃなくて、せっかく田舎に暮らしているのだから、ぶどうの果実酒を作ったり、田舎ならではの仕事をもっとしたいんです」

と、女性らしい本音も聞かれた。

山菜の季節にはみんなが山にビニール袋を持っていき、仕事そっちのけでワラビやぜんまい、タラの芽摘みに夢中になるのだという。秋には舞茸も松茸も採れる。

山からの恵みに誰もが感謝しつつ、山と向かい合う静かな暮らしが、そこにあった。（金山淑子）

チェーンソーの使い方も堂にいったもの。英国製ワークブーツがカッコイイ。

造材面積は1200町歩の3分の1。今年からはケヤキも植栽している。

林業こそが町の活力

第三セクター「サン・グリーン智頭」も発足

鳥取県智頭（ちづ）町

5つの組合が一堂に会して、製品化まで一環して手がける木材団地。

「日本は森林資源の宝庫です。豊かな森があるから水も豊富で、都市も工業も安定的に発展してきたんです。

しかし、それを支えてきた山村は後継者不足と木材価格の低迷により窮地に立たされています。国内材は建設材としても日本の風土にマッチして大変レベルが高いのに、安い外材の犠牲になってきました。価格は、昭和40年頃のままで、1立方メートル2～3万円といったところ。世の中の賃金は10倍になっていますから、物価のスライドでいけば20万円にならないといけんのです。」

智頭町森林組合常務理事の岡田一さんは、開口一番こう語った。

智頭町（人口1万1000人）は、鳥取県の東南部、岡山県境にあり、昔から山陽と山陰を結ぶ宿場町として栄えてきたところ。深い山あいにぽっかり広がる田園地帯で、周辺には氷ノ山後山那岐山国定公園に代表される1000メートル級の山々がそびえ、そこから流れ出た4つの川が町の中心部で合流し、千代川となって日本海へ注ぐ。山林は全面積の73%。

「日本の材木は世界一レベルが高い」と語る岡田常務

智頭町の林業は、〝慶長スギ〟に代表されるように長い歴史を持ち、その美林は町のシンボルになっている。

代々受け継がれてきた造林、育林技術と内陸型の気候風土（冬寒く雪が降る）によって育成した智頭杉は、木目通直、材質緻密な淡紅色で、木材として高く評価されている。

最近は、杉を生かした郷土工芸品として、杉の木の絵本や香りのよい木工品などが人気を呼び、また、21世紀における「木の家」の提案など、森林を生かして、シンポジウムや研修活動にも、町をあげて力を入れている。

全国に誇る智頭材を近代的な施設により付加価値を高めていこうと、昭和61年から五カ年計画で開設した木材団地は、町の中心地から車で二、三分ほどといった小高い場所にある。

総面積約4万6000㎡の中に（協）智頭製材工業、（協）智頭木材ハウス産業、智頭流通加工（協）、智頭町建築事業（協）、智頭町森林組合の五つの共同組合による近代的工場群があり、山から搬出してきた木材はここで加工、製品化まで一貫して行われている。グラウンドやテニスコートもあり、〝林業の町・智頭〟の心臓部にあたる存在。

広大な工場内は最新鋭の機械を導入して省力化が進んでいるせいか、人の姿は少ない。製品の管理部やプレカット施設では若い女性も働いている。

外には運び込まれたばかりの杉、ヒノキの丸太が山と積まれている。中には樹齢百年以上と思われるヒノキもあり、その雄姿に見とれてしまう。

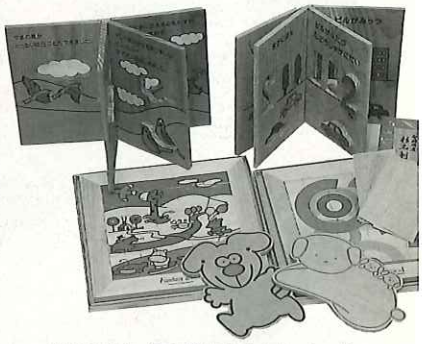
木材市場もあり、毎月8の日にはこれらの銘木の市が開かれ全国各地から木材関係者が集まり盛大な市売りが行われている。

「山には切り出しを待っている木がかなりありますが、運び出す人手が足りない。これが問題なんです。」と岡田常務が語っていたが、その役割を担っていくのも森林組合の仕事。

そのため、平成3年に林業後継者育成と山で働く人の待遇改善のため、第三セクターの株式会社「サン・グリーン智頭」が設立された。現在13人のメンバーで構成され、山林の作業の他に、農協や町からの委託を受け、ライスセンターや温水プールの管理なども運営しており、温水プールではスイミングスクールも開いている。

「近い将来は、30人くらいの社員で、林道の開設、機械による間伐、運搬などを行っていくようにしたいと思います。現在月給制で祝祭日、土・日曜日は休み。都市からきて働きたいという人にもチャンスを与えたいと思っているところです。」

先人たちが、それこそ命がけで守り育ててきた「山」を若者達が受け継ぎ戦力となっていけるかどうか、これからが正念場でもある。



〝杉のまち・智頭〟にふさわしく、杉で作った絵本やはがきが人気を呼んでいる（智頭町物産センター他で）

浜中漁協婦人部の皆さん

浜の母さんの森づくり

北海道根室地区・漁婦連を訪ねて

漁師たちは昔から「森を見て魚を獲る」と言い、豊かな森と川があってこそ魚が獲れるのだということをよく知っていた。

とくにサケの場合は、きれいな川の水を利用して卵をふ化し、春になると稚魚を放流する。彼らは下流へ下流へと泳ぎながら大海へ出て姿を消し、やがて4年後に成人してその川へ戻ってくる。命を育んでくれた川や河口の味、匂いを覚えているのだ。

かつては原生林で覆われ、無数の自然の川が生い茂る林の中を蛇行しながら海へ流れていた北海道は、世界有数の魚たちの宝庫でもあった。

その豊かな森や林は江戸時代の本土からの蝦夷地支配、明治の北海道開拓、戦後の大規模酪農開発などで、壊滅的に失われ、大地は驚くべき速さで変容した。同時に沿岸の漁獲量が年々減少していく。

漁場環境の深刻な危機。まわりの山や海岸を見れば河川と渚の荒廃ぶりがすぐわかる。

これはもうとり返しのつかないところに来ているかもしれない。とにかくやってみよう。漁業関係者はせっぱつまった思いで「森と海はひとつ」を合言葉にコツコツと木を植えはじめた。漁業組合のお母さん達が中心になって植樹した木は6年間が過ぎ20万本に達した。

豊かな森が再生し「自然との共生」が再び営まれるのは百年、二百年先きかもしれないが、とにかく木を植えよう。北海道指導漁業協同組合連合会の呼びかけではじまったこの運動に森林組合や自治体も協力、浜の母さんの奉仕活動が各地で定着しはじめている。

その様子を根室地区の三つの漁港で取材した。（写真／横山宏一　文／浅井登美子）

昆布の豊かな海床に

植林した木は3000余本

●浜中漁港　婦人部

採集し干した自慢の昆布を持って、左から、宮川さん、長谷川さん(手前)、伊藤さん、鈴木さん。

昆布といえば北海道。道東は古くから昆布の産地でも知られ、浜中湾はその拠点になっている。根室半島の付け根にあるおだやかな湾で、東端は霧多布岬、北部の丘陵地にはムツゴロウの動物王国がある。

浜中漁業組合の昆布漁家は15支部、470戸と規模が大きい。浜の中心部にある漁業組合の事務所で、婦人部長の宮川和子さん(60歳)、副部長と支部長の鈴木栄子さん(44歳)、伊藤雅子さん(50歳)、長谷川初代さん(47歳)が待っていてくれた。

「昆布漁の最盛期は終わりましたが、海がしけると浜に出て流れついた昆布を拾うのがお母さん達の仕事。今日は天気がよくて海もおだやかだから、ひまなんですよ」と宮川さんは言う。

しかしサケ漁などと違って、昆布漁は夫婦または親子など二人が船に乗って採集に出かける上に、採った昆布を干して等級ごとに整えて、出荷までのこまごまとした作業を担うのは女性たちの大切な仕事。お母さん達はいつも大変忙しい。

他には、サケマス、カニ(花咲ガニ、毛ガニ)、シシャモも獲れるが、昆布漁家とサケマス漁家とは完全に分かれていて、昆布漁家が自家用だからといって魚を獲ることは許されない。それが漁業権というものであることをこの取材で改めて知った。

しかし、かつてのような大きな網元がいて全体を支配していた時代は終わり、いまは決められた日時にみんなで和気あいあい平等に採取する。

さて、いつも多忙なお母さん達だが、浜中漁港婦人部では、昭和63年から植樹の準備と啓蒙活動に取りくみ、平成2年から毎年かなりの数の苗木を林に植え続けてきた。

「平成2年がトドマツ300本、アカエゾマツ500本。3年にはトドマツ、アカエゾマツ合わせて1200本、4年には800本、5年には300本植えました。年間300本は組合や町で無料で提供してくれますが、あとは自分たちで購入しています」

4年間で合計3100本を植樹したことになる。植樹は支部ごとに当番を決めて5～6月頃実施するが、その後の手入れは浜中森林組合の森のベテラン技術者が行ってくれるとのこと。

早速、クルマに同乗して植樹してある林へ案内してもらった。漁港の中心街から約20分ほど走った小高い雑木林で、ムツゴロウ動物王国の隣りにある町有林。四WDをいとも軽やかに運転し、長靴にさっとはきかえて山道を歩き出す4人の姿に、自然の中でたくましく生きるお母さん達の姿をかいま見た思いがする。

植樹に提供してもらっている雑木林は約300㎡。クヌギなど広葉樹の二次林で、地表には笹が密生している。入口に「さかなを殖やす植樹事業／浜中漁業協同組合婦人部」の看板があり、そこから林に入って行くと、1m以上に育ったエゾマツが点々と濃緑の葉をつけて育っていた。

「せっかく植えても一、二年間は笹に敗けたり風や雪の影響を受けて、育たな

いのもあり、毎年百本前後が枯れています。それを点検し植樹し直すのも大切な仕事です」と伊藤さん。

「植えるだけでなく、下草の手入れなども自分たちの手ですることが理想ですが、昆布漁家は忙しいし、森の管理技術はあまりないので、とりあえず全員が海周辺の自然に関心を持ち、何かやっていこうと呼びかけています」と鈴木さん。

海岸周辺には草原や雑木林がふんだんにあるが、いざ植樹するとなると個人の所有土地や用途の規制があり、植栽場所が意外と少ないというのが宮川部長の悩みで、「今後は植樹運動を全町的に広げ、酪農家などにも参加してもらうようにしたいと思います。そのためにも私たちがもっと実績を伸ばしていかないと」と語る。

昆布漁にとって豊かな大陸棚が生命。浜中湾には小さな川が沢山注いでおり、沿岸には自然保護林も多いが、それでも雪溶けの頃には土砂が相当量流れ込む。それを除去することと、昆布床に生える雑草を取り除くことが大変な作業だという。

「地球の温暖化も深刻なんですよ。毎年必ずやってくる流氷が海底を洗って雑草を取り除き、沢山のプランクトンを運んできてくれます。その流氷が湾内までくることが少なくなったんです。冬はきっぱり寒くなくては」

自然のやさしさも厳しさも天の恵みと受けとめてきたお母さん達の何と魅力的なことか。おいしい昆布と特産品の「昆布しょうゆ」をお土産にいただいて、浜中漁港を後にした。

ムツゴロウ動物王国

西別川のサケマスふ化場

母なる川・西別川を守れ

酪農建設工事を見守りながら20年

●別海漁協 婦人部

次に訪ねたのは別海町の別海漁協。別海の海は西別川の河口にあり、川は昔から水質の良さと水量の豊かさで定評がある。サケマスの漁場としては北海道でもトップクラス。そのせいか別海漁協の組合員は、サケマス漁一本で生計を立てている人が多い。

西別川がなぜ素晴らしいのか、そのことを本誌取材の便宜をはかってくれた柳沼武彦氏（北海道指導漁協連・教育研修部長）が近著『木を植えて魚を殖やす』で詳しく説明している。

「源流は河口の浜別海から77キロm上流部にある摩周湖の湧水である。摩周湖は不思議な湖で、この湖に流入する河川は一本もない。そしてここから流れ出る河川も一本もない。ところが摩周湖からの湧水はたくさんあり、な

↑別海は秋アジの産地。昨年は22万トン水上げした。
←ニシンも獲れる風蓮湖湾。

福原さん(左)と大橋さん、植樹林で。

かでも西別川の湧水は最大級である」と書いている。

この水を利用して、水産庁のサケマスふ化場が早くから作られ、ここから毎年数千万尾の稚魚が放流される。北洋の大海から戻ってきたサケマスで夏から秋にかけて根室地区一帯の浜は大にぎわいし、178カ所に張りめぐらされた大定置網が銀色一色になるという。

しかし、この根釧原野を流れる母なる川にも危機がつきまとう。昭和40年代後半頃から〝ふけさめ〟(漁獲量にムラがあること)が続き、それと符合するように山の方が騒がしくなった。「新酪農村建設計画」「夢の酪農地を」「100億円の巨大プロジェクト」という見出しが地元の新聞のトップを飾った。

根釧の酪農建設はすでに20年前にはじまり、これに反対した漁民たちは「河川関連に関する覚書」を交わすことで、一応ケリをつけ、漁業者の同意がないと一切の工事はできないということを決めた。その後の20年間で覚書に基づいて協議した工事件数は年平均150~300件、総計5000件に達したと柳沼氏は書いている。協議のために費やした時間は膨大、しかし河川流域は常に工事の傷が癒えることはなかった。

800haに及ぶ「西別地区国営草地開発事業」では、話し合いに10年間を費やし、西別川に沿って別の浄化排水路を建設し、泥炭を沈澱させてから川に流すという方法を採用している。

〝川上を見守る〟ことの大切さと虚しさを日常的に見てきた浜のお母さんたちは、ごく自然に次のステップ〝植林〟へと取り組んでいった。

昭和63年に行われた北海道漁協婦人部連絡協議会(道漁婦連)で、創立30周年記念事業として「お魚を殖やす植樹運動」がスタート。この運動は全道で普及し、平成4年までに117地区の漁婦連で合計20万895本の樹の苗が植栽されている。

別海漁協は「お魚を殖やす植樹運動」でもリーダー的役目を果たし、婦人部長の大橋久子さん(51歳)は根室地区漁婦連の会長も務めている。

取材日の数日前に婦人部の会議で札幌に行ってきたばかり。

「誰かがやらないとね、こういう運動は。幸い別海はサケマスだけで食べていけるので秋漁が終れば少しひまが出来るし、うちは長男がやる気を出して手伝いはじめたから」と大橋さんは言う。

「漁業は漁業権の問題があり、新規参入はムリ。一つの家でも後継者として長男がいれば次男はいらない、外へ行って別の仕事で稼いでくれ、という世界です。従って組合員メンバーはいつも同じ顔ぶれで、お互いの気心も全部わかっている。それが何十年と顔をつき合わせていると会議もマンネリ化しやすくて、大切な話し合いもインパクトに欠けやすくなる。どのようにして適宜緊張感を持たせ、常に新鮮な雰囲気にしていくかで、結構気を使うんです」

別海漁協婦人部は、同じ別海町の北部にある野付漁協婦人部(部長・北潟珠栄さん)と協力、昭和63年から同じ場所に当番を決めて植樹している。毎年1000本近くを植えて、6年間で6022本のアカエゾマツ、トドマツ等を植えた。

「サケによって生かしてもらっている」という思いは全町的にあり、町が土地を提供してくれた。森林組合も全面的にバックアップしてくれ、苗木の提供と下草刈り、ネズミ防除等の管理も引き受けてくれている。

翌朝、大橋さんと副部長の福原利子さん、それに組合事務局の女性の3人に案内してもらって、植樹した林の一部を見学した。

床丹川のサケマスふ化場周辺の林にアカエゾマツなどが約1500本、平成2年には「みどりの日制定記念の森」がつくられ、同年と翌年で2100本植樹、さらに平成4年には「お魚を殖やす植樹運動記念の森」もつくられ2500本近い苗木が植えられている。

葉を落した雑木林の中で、まだ40~50cmの小さな苗木が芽を伸ばし小枝を張り、冬に立ち向かおうとしている。大橋さんはそれらをいとおしそうに、見守る。

しかし道路をはさんで広大な牧場があるが、そこには林らしいものはあまり見えない。牛たちのためにももっと木立があるといいのにと思う。

西別川には、自然林が残っているが、これもひと昔前に比べたらかなり変容しているに違いない。美しい川よ、いつまでも。そして、母さん達の育てた木々よ、早く大きくな~れ。

風蓮湖の浜で。ニシンを獲ってきた漁民と語る福原さん。

「漁協婦人の森」は地域おこしのシンボル

●標津魚協 婦人部

5月には婦人部全員が参加して植樹を行なう。

別海町から標津町へ向かうクルマで約1時間の旅。途中の海辺には、魚介類の販売でにぎわう野付港、地平線の向こうに懸案の島々があることを実感する「北方記念館」、白鳥が憩う湾などがある他は、広大な草原地帯と紺碧の海が続く。

やがて活気に満ちた標津魚港へたどりついた。根室海峡のほぼ中央部、知床半島の付け根のところに位置し、秋サケ日本一の取扱量を誇るそうで、サケの加工場も多い。

標津川など5つの河川があり、ふ化施設も充実、毎年数千万の稚魚が放流されている。

町の中心部に真新しいレンガの漁業組合事務所があり、応接室では婦人部長の新川洋子さん(43歳)らが待っていてくれた。

新川さんは前任部長の川上恵子さんが体調をくずされたため、昨年4月に部長に就任した。

「先輩たちが永年努力しながら培ってきたものをしっかり守り育てていきたいと思っています」と語る。

婦人部の部員は52名。毎年5月末に行われる「漁協婦人の森」の植樹祭には全員が参加する。昭和63年に1000本植樹以来、毎年500本づつアカエゾマツを植えてきて、いまでは3500本になっている。

漁業組合の成田暁美さんから説明があった。「組合は昔から山林を保有していました。昭和30年代に長い不漁が続き、浜では生活していけないという時がありました。そこで組合で山を購入し、植樹を推進し、場合によっては肉牛の飼育も行うようにしたんです。」

そんなせいか漁民の森林への関心は高く、婦人部の植樹活動に際しては、町も森林組合も全面的に協力してくれた。町が町有林2・5haを提供してくれて「漁協婦人の森」が誕生、苗木も町と営林署が無償提供してくれる。

「同じ地域にありながら交流の少なかった林業と漁業が協力し合うことで、地域の自然や暮らしを守り発展させていこうという大きな原動力になっています」と新川さんは言う。

婦人部のお母さん達が全員で参加する植樹祭は、春の訪れを讃歌する楽しい交流の場にもなっている。植樹のあとも時々見回りにきて、無事に苗木が育っているかを確かめているという。

他には、海岸のゴミ拾い、家族たちの健康推進活動、地域ぐるみの在宅介護活動などを婦人部では日常的に手がけており、チームワークのよさは抜群だと副部長の木村ヒシエさん、佐々木澄さんは語る。

「ここの秋サケはとてもおいしいですよ。イクラ、スジコ、干物なども日本一」とPRも忘れない。

帰り際には新川さんがわざわざ駐車場まできてくれて、クルマが見えなくなるまで見送ってくれた。次はお母さんの働く姿を見に、また訪ねたい。

左から成田さん、新川さん、木村さん、佐々木さん。

若者らが二週間合宿生活
20年目を迎えた「草刈り十字軍」

（富山県）

らの作業が続く

学生らが全国から集って始めた山林の「下草刈り運動」が昨年の夏20回目を迎えた。

富山県下に集った若者たちは一22人。

炎天下での慣れない草刈り作業はかなりきつかったが、二週間の共同生活を通して体得したものは大きく、たくましく日焼けした顔で、「また来年も会いましょう」と言って、すがすがしく別れていった。

受け入れは4地区の森林組合

「草刈り十字軍」は昭和49年、富山県内の造林地への除草剤の空中散布に反対して、全国から集まった学生らによって始められた下草刈り運動。多少の紆余曲折はあったが、関西・関東の大学連合会などが中心になり、参加者を徐々に伸ばしてきた。

受け入れは各地の森林組合。平成5年は大沢野町、福光町、小矢部市、大山町の四カ所で行われ、総面積40haの草刈りを行った。

今回は地元の大きな民家を借りて宿舎に

私が参加したのは大沢野町須原。「草刈り十字軍」活動の拠点の一つとして知られる。

大沢野町グループは、学生、社会人の混成チームで、最年少は15歳の高校生、最年長は58歳の男性と、バラエティに豊んだ28人。7月26日から8月9日までの約2週間かけて行った。

宿舎と、電気、ガス、水道代等の光熱費は森林組合が用意負担し、合宿生活と草刈りは各隊の自

初めて参加した高校生たち

宿舎から山まで歩いて約30分

食事は当番制で、自分たちで作る。朝5時起床、6時には食事をすませて出発。

マムシ、ハチ、ヤブ蚊に悩まされながら

主性にまかせている。今回の宿舎には大きな民家を借り受けた。

労賃として1ha当たり12万4000円が支給される。これを人数で配分、食費代を引くと一人が受け取る金額は日当約3000円程度。富山までの交通費や、足袋や軍手は自己負担のため、遠方から来た人は当然赤字になる。

「仕事期間が長引けば長引くほど割りが合わないんですが、お金ではない何かを得ることができるのでしょう」と森林組合の加藤さん。

大沢野隊隊長の河田さん(21歳)は、「草刈りを終ったときの感動が忘れられないんですよ」と語る。

一本杉の下がセレモニー広場。前方に砺波平野が見える

「登りに10分、落ちるの10秒」といわれる急斜面での下草刈り

「共同生活は楽しい」と高校生の柴田君(18歳)

「汗をかく喜びが味わえる」と仙台から参加した加藤さん（28歳）

最年長、山仕事のベテラン松崎さん（58歳）

きつい仕事だが、魅力も大きい

早朝5時起床。すでに台所では食事当番が朝食の準備をしている。眠い目をこすりながら食事をすませ、6時には作業服に地下足袋姿で出発、約30分歩いて現場へ。

草刈りは急斜面での手作業。〝45分働いて15分休む〟を1セットに、午前中に5セット、午後3セットが目標。

「最初の二、三日は時間との闘いでした。もう昼だろうと時計をみるとまだ朝の7時、8時だから、やんなっちゃった」と高校生。小雨が降る中での作業だが、「今日はカンカン照りでなくて楽ですよ。日がよく出ると日陰がないのでつらいですよ」と最年長の松崎さん（58歳）。彼は「シルバー世代を活用できれば山は荒れない」と語る。

仙台から参加した加藤さん（28歳）は参加の理由を「汗をかく喜びですかね。機械を使わずにこれだけできるんだと、人間の力のすごさに改めて感動します」

「自分の刈ったあとを見て、俺もやればできるんだなと感じます」という松本さん（19歳）は漆職人をめざしている。

「年齢の違う人と出会えて楽しい。大人の世界や社会人の話が聞けます」と高校生の柴田君。佐藤君（19歳）は「いろんな友達ができ自分の好きな仕事が見つかった」と言い、草刈り十字軍に参加したのがきっかけで林業の仕事についている。

自然保護派、自己鍛練派、アルバイト派（?）、友達派と想いはいろいろだが、一夏の体験から得たものははかり知れないほど貴重なものだったに違いない。

写真・取材／高坂敏夫

2週間にわたる作業が終わって思わず抱き合ったり胴上げ。来年の夏もまた会おうと別れていく。

森の心に耳を傾けてごらん

高橋延清（東京大学名誉教授）

すべては森が教えてくれた

やぁ、どろ亀さんだ。万事に出遅れてしまうどろ亀さんは、今の世の中のスピードには、とてもついていけない。最近は腰もいたいし、目も悪くなってきた。だが逆にね、この頃は〝目には見えないもの〟を感じるようになった。それは人の心であり、森の心だ。それをこれから、思いつくまま話していこうと思う。ゆっくり、のんびりとね。

さて何から話そうか。どろ亀さんが36年間過ごした樹海のことからにしようか。やっぱりあの樹海こそ、どろ亀さんの出発点であり、恩師であり、魂が伝承される所だからね。

東京大学の北海道演習林は、北海道の中央部の富良野市の山部にあって、総面積は約2万3千ヘクタール。東京・山手線の内側の面積とほぼ同じ広さの森だ。ここは北方林業や林学の学術研究の場として、国内はもとより、世界各国から研究者や見学者が訪れている。というのも、この樹海は人間が少し手を加えてることによって、森が持つ活力、生産力を最高水準に維持している世界最大級の天然林だからだ。一昨年、ブラジルでの地球サミット以来、人類と地球環境の問題がクローズアップされ、改めて豊かな未来が模索されているが、この北海道演習林はそのひとつの答えを示している貴重な存在なんだ。

この結果が出るまでは、長い長い道程だった。初めは大学で教わったドイツ林学を実践したんだが、失敗ばかりしておった。どうやってもうまくいかず、頭が変になるほど森の中を歩きまわった。そしてどろ亀さんは、ようやく気がついたんだ、森が教えてくれていることにね。

よく見ると、森林は完全にバランスがとれた状態に向かっているんだ。人間の時間感覚では止まっているようにみえるが、実はゆっくりと、しかもダイナミックに、針葉樹林と広葉樹林が混じり合った針広混交林へとね。これを極盛相の森というんだが、自然のなかでここまでなるには3百年も5百年もかかる。

さぁ、そこで人間が少しばかり手を貸して、その移り変わりを早めてやるんだ。そして極盛相直前の状態を保つようにする。こうなったら、森はいつも元気だ。自然災害や病害虫にも強く、生息するあらゆる生き物たちと共生できる豊かな森としてね。

森林には環境保全の面と、材木を生産するという経済面がある。この二つは対立すると思っている人が多くて、自然保護派のなかには「絶対に木を伐るな」という人がいるけれども、そうじゃあない。

林分という単位でよく観察して、極盛相へと誘導する施業をすると、常に材木を生産しつつ立派な環境保全林としての役割も担える森になる。こういう森にするための伐り方をすると、伐れば伐るほど良くなっていくんだ。それをまとめたのが『林分施業法』。これは教授だったのに一度も教壇に立たず、論文も書かなかったどろ亀さんの唯一の理論で、たった六原則しかない。

もし論文のための実験であれば小さな面積の方が実験はしやすいし、結果も早くでる。

東京大学北海道演習林
（撮影／柴田前）

だがどろ亀さんにとっては、環境保全と林業の事業を両立させるための実験だったから、可能な限り広いスケールでやらなければ、意味がなかった。どろ亀さんは要領が悪いし、バカなところもあって遠まわりばかりしてきたが、これが良かったんだね。現地の職員の仲間たちが気持ちを一つにして、10年たてば必ず成果が出ると確信して協力してくれた。

作業は、病害虫木や老衰木、枯損木、遺伝的に不良な木などの悪い木から伐採することから始まった。もちろん、伐る木を選択する時は、そこにすむ野鳥や動物たちのことも考えながらね。林道もつけた。樹木の陰に隠れて見えないように。だが大型トラックが通れる林道が、今は8百キロ以上につらなって動脈となっている。

そういえば、どろ亀さんとニックネームがついたのも、この仲間たちと朝から晩まで笹をこぎ、地面に這いつくばって森の中を歩きまわっていたこの頃だ。酒好きのこともあって仲間たちから〝亀〟と噂されとったんだが、ある雨上がりの日に泥まみれになって〝どろ亀〟になったんだ。自分でも大いに気に入ったんだが、どうもバランスが悪くて〝さん〟をつけた。これでピッタリと決まって〝どろ亀さん〟になったんだ。今ではニックネーム。

小さな森の百年先を夢見て

さてさて、話を戻してと。そうだ、今度は誕生したばかりの新しい森の話をしようか。どろ亀さんとは、もう半世紀を超えるつきあいで、日頃から森づくりに熱心な野月筆雄君が「樹を植えたいから協力してくれ」と言い出したのは六年前だった。

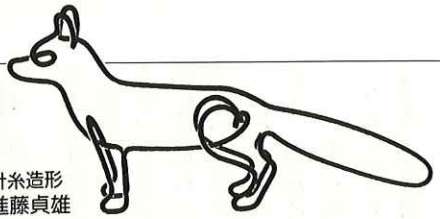
会に名前をつけてくれと言われて、さっそく「山川草木を育てる集い」と命名したこの会は、老いも若きも参加できる植樹ボランティアなんだ。

去年7月に、集いの5周年記念として南富良野町かなやま湖畔に『エジンバラ公の森』が披露された。これは平成4年に、どろ亀さんが学士院エジンバラ公賞を頂戴したのを記念した森でもあるんだ。記念式典と植樹祭には、プライベートで英国公使ソープご夫妻、多くのご来賓、各地から駆けつけた集いのメンバー、地元の小学生など大勢が集った。

森の中央には、亀そっくりの記念碑もあってね。入魂式でお坊様がその記念碑に日本酒をたっぷり注いでくださった時は、どろ亀さんも、つい顔がゆるんでしまった。石のどろ亀さんもさぞ喜んでいたに違いない。この記念碑の後ろに、ソープご夫妻がヨーロッパのアカマツを、どろ亀さんと兎（妻）はアカエゾマツを植えた。参加者もそれぞれカツラやサクラ、ミズナラなどを植樹したんだよ。

このエジンバラ公の森は小さな森だが、やがて百年が経つ頃には、人々が憩う森になっていることだろう。その経過を地元の小学生たちが観察、記録することになっている。南富良野町の楯町長が、この森を地球環境を守る発進基地として永遠に育て、青少年の緑の教育に役立てようと決意を述べてくださった。

台風による杉林の崩壊（写真／大分県大山町企画課）



針糸造形
進藤貞雄

みんなで、やっていこう

この先、この森にも暴風雨や大雪などの災害はあるだろうけれど、いつしか様々な生き物たちが生息し、行き来する豊かな森となる。そのために地元をはじめ、大勢の方が力を寄せてくださっている。この森の誕生は、かかわった人々の緑のふるさとになることだろう。どろ亀さんは、このような森が全国各地に増えていって欲しいと願っている。

新しい森といえば、今年にも産声をあげそうな森が大分県の大山町にある。あのあたりは、山々のふもとから天空まで杉が植えられていてね。平成3年の台風で大被害にあって、風倒木や土砂崩れの跡が、目をおおうばかりだったよ。その森を歩いてきたが、野鳥の声ひとつしなかった。小動物の姿もその形跡すらなく、しーんと静まりかえっていて、生態系が死に瀕している証拠だった。これはずっと昔から、経済価値が高いからと杉ばかりを植林した結果だったんだ。

しかしね、大山町の人々は「このままではいけない」と気がついた。四季を感じる森を、動植物が豊かな森づくりをしなければと決心したのだそうだ。百年、二百年先に向けて、今動かなければとね。それで自称〝どろ亀さんの息子〟のC・W・ニコルや、近自然河川工法の福留先生や大勢の仲間たちと、どろ亀さんも協力することになった。

まだ設計以前のその森は「田来原の森」と呼ばれているのだが、どろ亀さんはその地に立って直感した。ここにはすでに植えられていたクヌギやクリなどの実がなる木を生かして、季節に応じて色を変える広葉樹、そしてアクセントの針葉樹などがある明るい森が良いと。人々が集って喜び、森の生き物たちもやって来る森が創造できるよ。

森林の生産性と環境保全のバランスに挑戦している大山町、矢幡欣治町長の勇気をはじめ、未来に向かって動きだした人々に、どろ亀さんは心から敬意を表する。南富良野町の、そして全国各地で同じように活躍する人々にも。なぜならば、森林を育て緑を守る、ひいては地球環境を良くしていくには、強い意志と忍耐が必要だからだ。今のどろ亀さんには、こうした人たちの心が見える。

環境問題は、一朝一夕で解決するものではない。永久的にそして継続してこそ、やがて効果もでてこよう。継続の土台となるのは、こうした緑への関心をもった大勢の人の心だ。ドイツには「森が死ねば、人も死ぬ」ということわざがあるが、これは私たちが住む日本だって例外ではない。世界的にもまれなほどの動植物相に豊み、四季に彩られ、水も緑も豊かなはずの日本の将来はどうなるのだろう。

みんなで、できることからやっていこう。落ちているゴミを拾うことから、木を一本植えることから、緑への関心を持つことから。ひとりの人間の寿命が永久に続いてほしいと思うのは、みんなの願いだ。そのためにも、森は不可欠な存在なのだということを忘れないでほしい。

どろ亀さんは年もとってきて、一人でできることは数少ないが、これからも森の心をみんなに伝えつつ、少しでも役に立ちたいと願っている。やあ、すっかり長くなってしまったね。おしまいまで、つきあってくれてありがとう。そして、どろ亀さんが森の心を伝える機会をくださった「でぽら」編集部の皆さんに感謝する。最後に詩をひとつ、みんなに贈って終わりにすることにしよう。

森の世界

森には
何一つ無駄がない
植物も　動物も　微生物も
みんな　つらなっている
一生懸命生きている

一種の生きものが
森を支配することの　ないように
神の定めた　調和の世界だ

森には
美もあり　愛もある
はげしい闘いもある
だが　ウソがない

いま林業が新しい！

高知県は、太平洋岸の町を除いて、深い山々と清流に抱かれ、町村の総面積の約90％以上が山林というところが過半数を占めている。

過疎化や人口の高齢化で思うように保全・活用が進まなかった山林だが、ここへきて様子が変わってきた。「山を守り育てることで地域おこしを」という気運がたかまり、森林作業員の給与制導入、若い人材の確保、機械化による新しい作業システムづくりなどが各地で積極的に始まっている。

「開援隊」「ユースフォレスター」という名称で若者やUターン青年の導入をはかっている池川町と檮原町を取材した。

安居川の清流と池川町の街並み。

「開援隊」が森林の未来を拓く

Uターン者など9人のメンバーで

高知県　池川町

池川町（人口2744人）は、四国のほぼ中央に位置し、清流・安居川、土居川がV字峡をつくっている。標高140m、周囲には1300mほどの山々が連なり、地形は全般に急峻だが、気候温暖で降水量が多く、森林の成長には最適なところ。森林率は94％。

森林組合は町の中心部、役場の向かい側にあり、街並みと平行して安居川が流れている。その美しさは、ここが街の中であることを忘れるほどで、山間に広がる温泉街のような雰囲気だ。

上流には清冽な渓谷美をなす県立自然公園「安居渓谷」がある。

三浦忠幸専務理事のお話だと、昭和50年の台風で安居川が氾濫、役場や森林組合事務所も流され、清流が戻るまでに三年以上かかったという。

「森林組合ができて17年、昭和42年から林業事業を行なってきましたが、河川の氾濫を機に、杉の間伐や枝打ちなどの徹底を痛感しました。

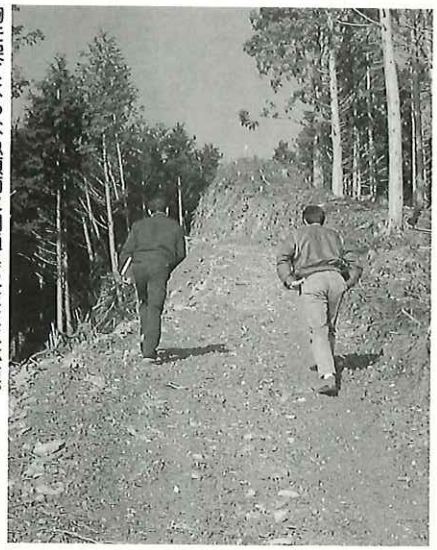
組合員は1000人ちょっといますが、山は個々人まかせでは守れない。会員の出資金の他に町や林野庁等からの助成金により、間伐を組合事業として行うようにしました。年間800～1000haづつ間伐しています」

池川町の山林は1万3350haのうち民有林が1万125haで、人工林率は81％。戦後の植栽林で、杉が81％、ヒノキが18％となっている。

2mのミニ林道をつくる

森林作業を効率よく行っていくためには機械が入れる林道がまず必要である。

そのため同組合では、従来からの作業班に加えて若手組を中心に、4年前「開援隊」という林道造成班を結成した。町も全面的に協力、事業費には「ふるさと創生基金」が充てられた。



胸を突くような急傾面に開通されたミニ林道。

岡崎組合長（左）と三浦専務理事。

「開援隊」は、土佐出身の藩士坂本竜馬の「海援隊」にちなんで名付けたもので、山をひらき、森林の未来を拓いていこうという願いがある。

メンバーは30代の若い人を中心に9人で、うち5人がUターン。山仕事を効率よく行っていくためには、車が入れる道が必要だ。そのために「開援隊」がミニ・ユンボで幅2mほどの道を造成していく。

間伐を兼ねたこの林道づくりには山林所有者の反対はなく、逆に感謝されている。今までは10キロもあるチェーンソーを背負って1時間以上かけて歩いた山道が、車なら10分もあれば行ける。

道ができたあとは、間伐班チームが作業。切り出された杉の木は製材所（小径木処理工場）に運ばれ、最近はログハウス作りにも活路が出てきている。

「今までは木を育てるだけという投資の積み重ねで、組合運営にとっては苦難の連続でしたが、これからは間伐材を利用した国内材の見通しも明るくなっており、林業は地域おこしの核になっていくと信じています。組合員全員に社会保険や年金制度を導入、できるだけ月給制にして、若い人が森林作業に従事しやすくするように努力しています」

と岡崎正組合長は語っている。

左から 松本さん、岡崎さん、三浦専務、梅本さん。

「開援隊」が作業する山へ三浦専務に案内していただいた。運転してくれた事務局勤務の岡崎和也さんはUターン組。高知市のレストランで板前をしていたが、休日に子供たち（3人）と遊んでやれない、生まれ育った町で親子水入らずの生活を取り戻そうと、森林組合に転職した。奥さんは看護婦で、いまは池川町役場に勤務している。

車は安居渓谷の手前を右に入って急な林道を登っていく。途中にいくつかの集落があり、なかにはお年寄りだけが住み、空き家が目立つ地区もある。南側斜面に石を丁寧に積んだ家々が日溜まりのなかに静かに点在するさまは、都会人が見たらユートピア郷に見えるのだが……。

車は樹齢30～40年の杉林地帯に入り、手入れされた山の近くには「開援隊」の四クがとまっている。間伐班の車だ。

さらに約10分ほど走ると、山あいからカタカタ、ダッダッというエンジンの音がしてきた。広い林道から急峻な山道を登っていくと、作業中のユンボが見えてきた。この山道は「開援隊」が切り開いた道。杉を間伐したあとをユンボで整地し、固めたミニ簡易道路。山肌を傷つけることなく開いた自然に近い道だが、風水害等にも耐えられるよう配慮され、半永久林道として機能するという。

「Uターンしてよかった」

作業しているのは梅木洋さん（34歳）と松本聖拳さん（44歳）。リーダーの酒井孝介さん（36歳）は今日は休暇のためいなかったが、普段はこの3人が中心になって林道づくりをしている。

梅木さんの生まれは愛媛県。子供二人がいて町営住宅に住んでいる。

「この仕事はやったことがきちんと形に残っていくので張り合いがあります。機械が働いてくれるので身体的にはそれほどきつくはありません」

現在開墾中の寄合地区2000mをはじめ4年度中に8300mが開通、今までの分を加えると約2万mのミニ林道が開設された。

松本さんは3年前に神戸からUターンし、一昨年隊員になった。

「それまではユンボを売る方だったんですが、今は乗る方で気分的にいいですね。長男なので親と暮らしながら働けて、今はよかったと思っています」

作業は朝8時半から夕方5時まで、土・日曜日は原則として休日で、松本さんは釣りを楽しむ。

「趣味の釣りには最高の場所です。この辺の川にはアメゴが豊富、ウナギのでかいのもいます。一時間も走れば宇和島の海へ出られるので、海釣りにもよく行きますよ」

ただ残念なのは、現在奥さんや子供

とは別居中であること。「日給月給で約20万円、ここでの生活には十分ですが、家族を呼んで暮らすとなるとちょっとまだ不満」と語る。

役場職員なみの待遇をというのが組合理事たちの望みだが、1m開道して2000円の補助しか得られないので、今はこれがギリギリ。今後は国や県の助成金等により組合職員40人の全てを月給制にし、若い人はもとより長年林業にたずさわってきた高齢者には年金生活が送れるようにしたいと三浦専務理事は言う。

なお池川町と佐川町、越知町、仁淀村、吾川村の5町村では、林業の振興と後継者の育成を図るため、昨年7月に財団法人「ソニア」の開設準備事務所を越知町に開設、早ければ今年中に発足することになった。広域的に荒れる山に歯止めをかけていこうというものだが、森林組合の活動とどのように連動していくか課題も多い。

近代林業のパイオニアとして

高度林業技術集団「ユースフォレスター」

高知県　梼原（ゆすはら）町

梼原町（人口4824人）は、標高1000m以上の山々が連なる四国カルストが愛媛との県境にあり、四万十川の源流四万川の流域に開けた町。古くから土佐と伊予を結ぶ交通の要所として栄え、坂本竜馬や土佐勤皇党らの出身地で、「脱藩の道」「維新の道」があり、この道を多くの志士たちが駆け抜けていった。都会人と農家との交流をはかる「千枚田オーナー制度」など、ユニークな町おこしでも知られる。昭和60年以降は若者の定着率が高くなり、人口の減少化は鈍化してきている。

森林組合は町の中心部にあり、朝8時半には全員出勤して活気にあふれているが、間もなくそれぞれの作業現場に散っていく。

同組合（従業員102人）では平成5年4月に若い林業技術者集団「ユースフォレスター」（略称YF）を発足した。

「若さ」と「ゆすはら」をもじった〈ユース〉と林業者〈フォレスター〉を組み合わせた名前で、木の里・梼原の明るい未来を切り拓いていくための実働部隊。中堅・若手10名で構成され、平均年齢は36歳。

YFは、当面は作業路の開設や木材の切り出し、搬出を行うが、将来的にはプロセッサやタワーヤーダなどの高性能機械を駆使できる技術作業班として育成していく方針だという。

バックホーやダンプトラックは町が貸出し、基金で社会保険料等の一部を助成する予定になっている。給与は手取り約20万円で、実働時間は一日8時間、土・日曜日は休みとなっている。

10人のメンバーのうち5人がUターンで、中越利茂参事（42歳）の直属下に、3人が路網整備班、7人が伐採・搬出・輸送、選木等の林産班として活躍している。

中越参事は「町出身の若者たちが地元へ帰って意欲的に働ける場をつくるという若者定住対策としてのねらいもあります。

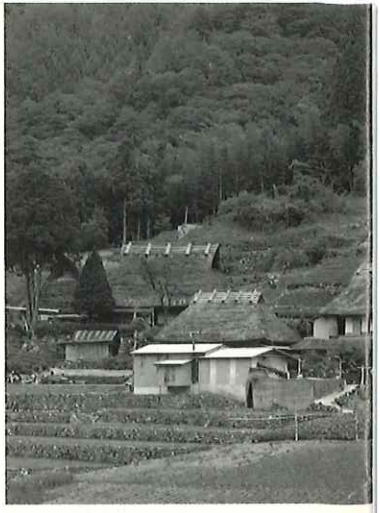
高知県は、県が都会の人に向けて空き家の斡旋をしていますが、あまり効果を生んでいないようです。山の作業の場合はチームワークが大切ですから、町の若者たちによるグループを編成し、林業の活性化を図っていきたいと思います」と語る。

中越参事。下方には製材所が広がる。

YFを若者定住対策の目玉に

梼原町でも老齢人口は26%を超えて、これからは3人が1人の高齢者を看る時代になる。高齢対策は若者定住対策でもあるというのが町の考え。そのために、若い時に一度は出ていった人が何時でも帰れるような場を用意しておく必要がある。

「ユースフォレスター」はその目玉的存在で、ここで学び働いた青年が次はリーダーとして各分野で活躍、将来は農業の請負作業もやれるような組織に



昔ながらの草葺屋根の家。町指定の文化財として保存している。

していく考えだ。

町ではUターン者のためのおしゃれな独身住宅も街なかに建設中で、現在12人が入居している。近い将来、若者の交流の場として「青年の家」も建設される予定になっている。

なお平成3年よりはじめた「千枚田オーナー制度」は、四万十川にちなんで都市の人に4万10円で田を貸し出す制度。オーナーは年何回か訪れて農作業を手伝い、収穫したお米のすべてと、地元の野菜、山菜などをプレゼントされる。現在50名が会員として登録しており人気がある。

YF班が年間5000mの林道を開設

中越参事の案内で路網整備班の活動する山を訪ねた。プレハブの建物（休憩所）があり、その先で伐採した木の搬出作業をしている。タワーヤーダを操縦しているのは中越信也さん（24歳）。Uターンしてきた一人だ。奥の方ではバックホー、2tダンプトラックによる道路開設作業が行われていて、幅3mほどの真新しい林道が続いている。平成5年度は1万mを開設、その半分をYF班が施工した。

タワーヤーダを操縦して木材の搬出作業。

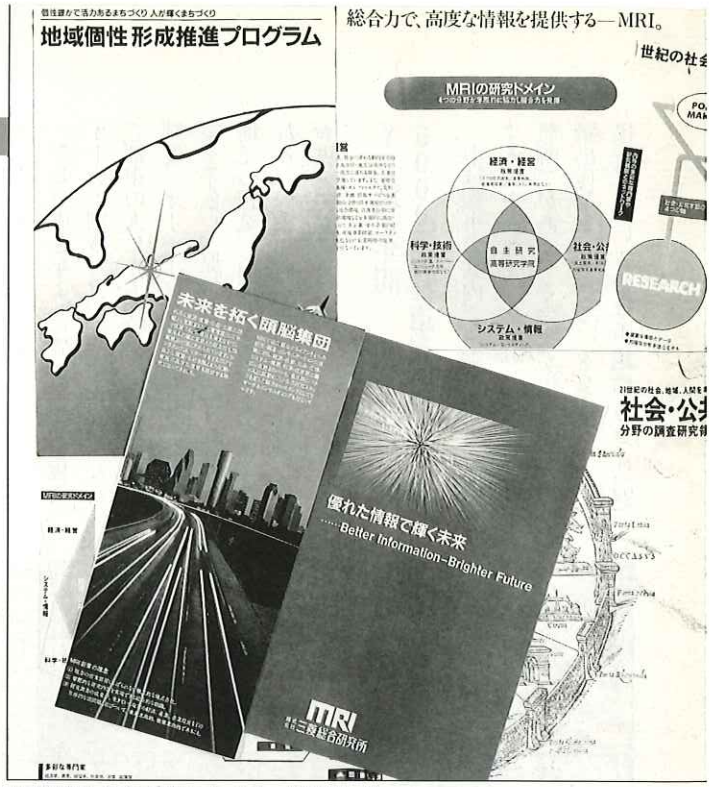
林産班、森林組合加工場で働く若い職員たち。

梼原町の総面積は2万3651haで山林は92%。人工林は杉が半分以上を占めるが、ヒノキ、マツも多く、人工林の48%が6～8齢級で、森林資源としても成熟してきている。山から搬出した杉、ヒノキは森林組合運営の加工場で製材される。機械化が進んだ広い工場では15人の若い男女が働いており、加工場庭には立派な杉、ヒノキの丸太が積まれていた。近々すぐ近くの1300㎡ある敷地に移転してさらに近代的な工場に模様替えする予定で、その先の丘の上には、町立体育館、グラウンド、老人ホームなどの施設があり、町の新しい文化&経済ゾーンとなろうとしている。

町では「梼原HOPE計画」を策定、21世紀には地場木材を使って歴史ある街並みの修景、木の里にふさわしい住まいと地場産業の育成をめざしている。

なお、「ユースフォレスター」メンバーの多くは大型自動車免許を持っているが、作業に必要な講習や資格は組合が負担し、各種研修に参加させている。林業士としての、公的資格も取得したいと班員たちも意欲的だ。

「国土保全の意味からも森林はとても大切ですが、その多くは山村僻地で、維持管理に苦労しています。川下や都市の人がもっと関心と理解をもって欲しいと切望します」という中越参事の言葉が印象的だった。（浅井登美子）



「三菱総研」の企業パンフレット、報告書一例

地方とシンクタンク——パートナーシップの時代へ

三菱総合研究所 地域経営研究室長川村雅人氏

調査・計画、人材育成、イベント等で地方と何かと関りの深い都市のシンクタンク。彼らはいま「地方」をどう捉え、どう関っていこうとしているのか。シンクタンクを代表して三菱総合研究所の川村地域経営研究室長にインタビューした。

「シンクタンクの役割も、時とともに確実に変化していますね。以前は、自治体の策定する総合計画が我々の〝主力商品〟でしたが、いまはむしろ、構想の具体化や事業化といった個別の事業にシフトしています」

三菱総合研究所地域経営研究室長の川村雅人氏は、開口一番こう切り出した。

自治体からの依頼があると、川村氏は「なぜウチみたいな値段の高いところを?」と尋ねることにしているという。ある首長は「オタクなら名前の通りがいいから」と答えたそうだが、「人を試すようで申しわけないが、しかし、いまはもうそんな時代ではない」と、川村氏は主張する。

川村氏によれば、人口の空白域と言われる北海道から九州を貫く山間部の縦断軸をはじめとして、状況の厳しい地域であればあるほど、意識の改革は進んでいるという。それにつれて、シンクタンクへの要求も大きく変わってきたと言うのだ。

「形式より中身と言うか、実をとると言うか、自治体からの要求はより具体的になってきています。総合計画というのはもともとが総花的、網羅的な性質を持っており、議会で問題になるようなことはほとんど作文されている。これを形式とすればその中身、すなわち実施計画のレベルで実際の政策は動いている。ここで出てきた個別具体の事業に、我々も知恵を出し、自治体も知恵を出す。シンクタンクと自治体の関係は、いま、こんなところに来ているんじゃないでしょうか」

「この〝関係〟のキーワードになるのが、パートナーシップだ」と、川村氏は言う。「自治体の職員と我々外部の人間が手を携えて、ワイワイガヤガヤと議論を重ねていく。問題意識も生まれるし、ヤル気のある若い人材も育ってくる。こうして得られた結果は貴重なものだ」と言うのだ。なかには「結果よりこうしたプロセスこそ究極の目的」と言い切る首長もいるそうだ。いわゆる〝手づくり〟を売りにした個人のシンクタンクが、多くの自治体でウケている背景には、こうした事情があるのかもしれない。

「我々がキッカケを作り出すことも大切なんです。こちらが素案を作り、向こうで議論をしてもらうように仕掛ける。先方が当事者意識を持ち始めたらしめたものです」

「井のなかの蛙」の落し穴——三つの症候群

川村氏がいま最も進んでいると考える自治体像は、この職員参加を中軸に据えつつ、外部のノウハウを貪欲に取り入れようとする自治体だという。「手づくり、手づくりと言っても、ここが揺らいでいるようでは、まちづくりはうまくいかない」と言うのだ。

川村氏は、外の世界に無関心であったために自己閉塞状況の悪循環に陥ってしまってい

地方とは20年以上の長いつき合い、川村雅人氏

る自治体には、次のような〝症状〟が顕著に現れるという。川村氏の診断方法はこうだ。

「主なところでは、たとえば『他と違う』症候群。こういう自治体は職員のヤル気もあるし、まちづくりにも熱心です。しかし、とにかく奇を衒えばいいというのでは、議論が本末転倒してしまっている。この言葉そのものがキーワードにはなり得ないんです」たしかに「他と違う」と言えば聞こえはいいが、これ自体が目的となればおかしな話である。

「そして『他と違う』の対極にあるのが『人まね』症候群。隣町がやったからウチもやる、あちらが建てたからこちらも建てるではやはりダメ。どういうまちづくりを目指すのかが、ハッキリしていない証拠です」この「人まね」と「他と違う」症候群では、話題になったふるさと創生資金の使い道で、ずい分耳の痛い自治体もあるはずだ。

「それから、最近目につくものでは『キャッチフレーズ』症候群。流行のキャッチフレーズをつけて、それで安心してしまう。かつては『活力』『豊か』、次に来たのが『緑』『潤い』、最近では『人間』『文化』といったところ。一見もっともらしいが、実は何も語っていません」

このほか、川村氏は、「首長の代わるたびに計画や人事がクルクル変わる」自治体などを例に挙げたが、こうした症状のための処方箋には、「職員参加」と「外部のノウハウ」が不可欠だと主張するのである。

「我々の仕事は、自治体の職員とワーキングを組み、一緒に議論をしていくなかで、我々の持っている中央の情報や他地域での事例といった外のノウハウを、プロ意識の下で加工し、検討材料として彼らに提供することなんです。最終的には、彼らがそれらを消化し、事業化への可能性を高めていく。箱物を造る場合でも、誰でも飛びつきやすい『どんな建物を造るか』からではなく、まず『どんな使い方をするのか』あるいは『どんな運営をするのか』という経営的視点から入ります」

「一つでもものにすれば金はあとからついてくる」

川村氏によれば、「戦術的側面から見て、まちづくりを成功させる秘訣には3つのポイントがある」という。秘訣その一は、役場を活性化する。その二は、住民をその気にさせる。その三は、地域外との人的ネットワークを作る。この三つである。

「上に文句を言っていてもダメ。まず自分が変わることです。役場の活性化とは、職員が活性化することと同義。よく住民主体と言われますが、そのためには職員が燃えていることが前提条件になります」これは、川村氏が力説する職員参加の原点である。

しかし、「ただいつまでも職員が燃えているだけでは、町は変わらない」と、川村氏。

「住民を仲間に引き込むことが必要です。いまは、地方が貧困に喘いでいた時代とは違う。まちづくりがいかに楽しいものか、そこに早く気づかせることが肝心。そのためのイベントなら、大いにやるべきです」

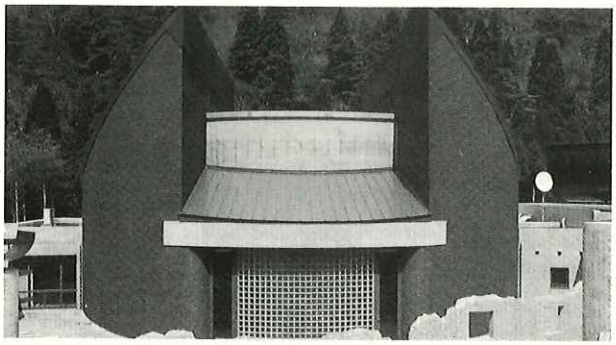
その一方で、川村氏は「イベントの3Kに陥るくらいなら、やらない方がマシ」とも指摘する。

3Kとは、「かっこいい」「金がかかる」「奇を衒う」の3つのKである。

「イベントは、あくまでも住民の意識をまちづくりに向けさせるための〝手段〟であって、目的ではありません。これを取り違えると、イベントに振り回され、何をやっているのか分からなくなる。ちょっとマスコミに取り上げられたばかりに、この3Kに走りだしてしまう自治体が意外に多いんですよ」

さらに、「こうしたまちづくりへの発想と仕掛けに際して、地域外との人的ネットワークは強力な援軍になる」と、川村氏は強調する。

川村氏が公私にわたって関わったという京都府大江町の場合、鬼の交流博物館を核として、全国の鬼師（鬼瓦職人）や鬼研究家、建築家、デザイナーなどのヒューマンネットワークを武器に、ユニークな「鬼のまちづくり」



京都府大江町の〝大江山鬼伝説〟に基づいた町づくり。「屋根付き鬼の回廊」（写真右）をはじめ、鬼のモニュメント、日本の鬼の交流博物館などの設備を持ち、鬼伝説に関わる祭りや研修会、イベントも数々行われている（企画・協力　三菱総合研究所）

を展開している。

「このほか、ざっと見渡すだけでも西川塾の山形県西川町、雪だるま財団の新潟県安塚町、梅栗植えての大分県大山町など、人的ネットワークを広げることで、まちづくりを成功させた地域は数多い。こうして何か一つでもものにすることができれば、陳情のために余計な費が関詣でなどしなくても、ちゃんと金はあとからついてくるものなんです」

優秀な人材が地方へ流出する!?

自ら提唱するこの人的ネットワークに関して、川村氏はふと複雑な感慨にとらわれることがあるという。

「20年近くもこの仕事をしていますとね、私自身の人のネットワークも増えてきます。そうすると、地方の知人から『個人的に相談に乗ってくれ』と頼まれる。こちらもビジネスですから、企業人として考えれば商売にならない話、困ったことなんですが、まあ、地域プランナーとしての一種の勲章のようなものだと思うようにしているんです」

「地方はもっとしたたかに」などと言っているうちに、どうやらこちらの株を奪われてしまった。「したたかついでに、この際、不況に乗じて地方に人材をかき集めてはどうか」

川村氏は、こう言って苦笑する。

「実際、地方に人材がいないという言い方は正しくない」と、川村氏は言う。

ある時、川村氏が「いくら選択肢の多い東京に住んでいるからといって、いつもトレンディな時間を楽しめるわけではない」と、地方の若者に洩らしたところ、「それはあなたの時間の使い方が下手なだけ。山村へ来れば、時間の使い方を教えてあげます」と、やり返されたという。

川村氏は、人材の有効活用と地方の活性化について、ある構想を心に温めてきた。

「バブルの頃、企業メセナという言葉が大流行しましたが、中途半端に文化メセナをやる位なら、そのエネルギーを地方に振り向けたらどうか。企業には、一風変わった優秀な人材が必ずいる。いまの企業の枠組みでは、そうした人材の能力を引き出せないケースも多く、本人たちも不満を持っている。こうした隠れた人材を、パイロットとしてどんどん地方へ送り出していくんです」

川村氏は、「企業は常に先を見て進むもの。少なくとも30年くらいのスパンで、物事を考えるべきだ」と主張する。

「たとえば、農林業志願者を企業内で募り、労働力として山村に送り込む。営農に必要な経費も企業がバックアップする。将来的にうまくいって上がった収益は、従来のように収奪という考え方ではなく、パートナーシップを生かして地域と配分する。こんな発想があってもいいんです」

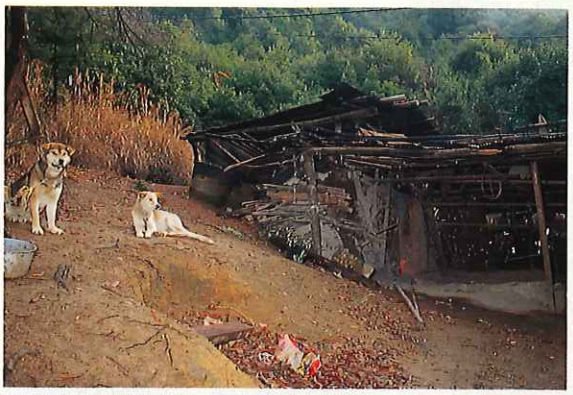
「山村留学にしろ、リゾートにしろ、我々がいままで実践してきた地方との関わり方には、いずれも窮屈な〝構え〟が見えすぎる」と、川村氏は指摘「そんなにしかつめらしく堅苦しく考える必要はないんですよ」と結んだ。

アドバイスともとれるこの言葉の中に、地域づくり実践のヒントがあるような気がした。（森省歩）

山の恵みを活かす紀州の森の特産品
備長炭

●カメラ
横浜義憲

「精煉」の瞬間。窯の温度は1400℃に達する。（関良次さんの窯）



犬たちも大切な家族の一員（坂本さんの窯）

深山から苦労して切り出してきたウバメガシ

白っぽいなめらかな硬質肌、叩くとキーンと金属音がする。一度点火すると、美しい真赤な炭はいつまでも安定した熱を持続し、魚や肉を独特の旨味に仕上げる。

山炭の最高傑作、備長炭。ウバメガシの原木のザラザラした木肌からは想像できないほどの変身ぶりである。

紀伊半島の南部、和歌山県の山中は、備長炭の特産地で、自然の恵みを活かして、より高度に再生するという山人たちの知恵と技、経験が伝承されている。

料亭や焼肉・鰻屋などで特に人気の、紀州の「備長炭」だが、いまでは炭を焼く人が少なくなり、高齢化している。戦前は村民のほとんどが炭を焼いて暮らしていたという中辺路地区でも、昭和30年頃の100軒が15軒になった。しかし和歌山県全体では、原木となるウバメガシの自生地はまだまだ豊富で、ここ那智勝浦でも炭焼き職人が点在しながら伝統産業の育成に力を入れている。

坂本操さん（65歳・那智勝浦町）は、長年見習い手伝いをしてきた長男（37歳）が四、五年前に古座で独立して炭を焼いている。

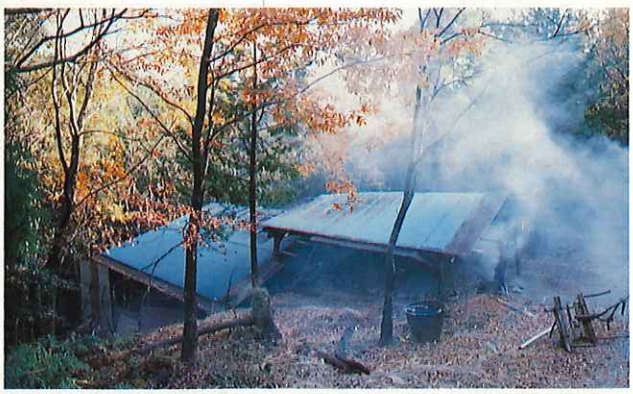
月二回焼くので、ほとんどが作業場暮らし。奥さんと犬三匹が傍らで見守っている。

見習生も二年間受入れたことがある。

「昔はバベ（ウバメガシのこと）のある山を買い、そこに作業場を作って焼いたが、いまは車があるので運び出してきて住まいの近くで作業ができます。ありがたいことに紀州の備長炭は大変人気があり、生産が追いつかんほどです。それだけに我々もそりゃあ気を使います。炭火が一度でもパチリとはねると文句がきますから」

坂本さんは直接東京の業者に販売、月二回トラックが取りにくる。最近は細身のものが好まれるようで、焼き上った炭は形・長さに応じて分類される。

関良次さん（64歳）は兄弟共に炭焼きを専業にするベテラン。窯の周辺を常に整頓し、道具一つにもこだわる。



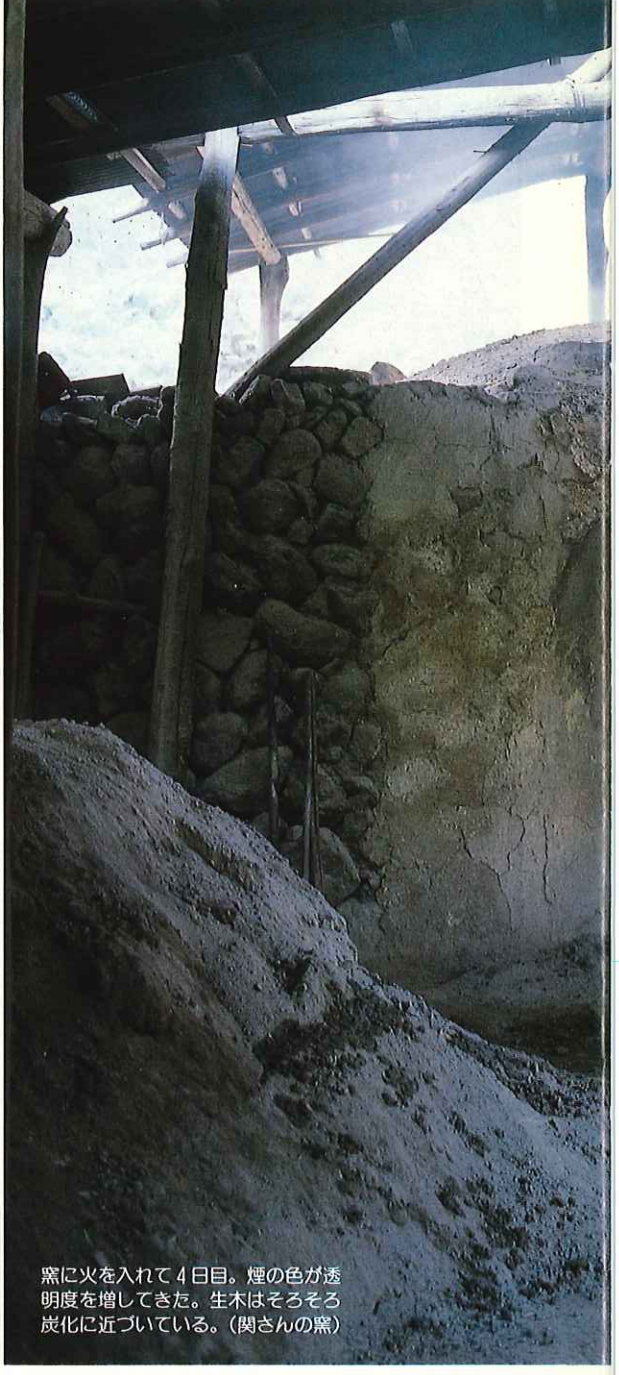
窯は静かな雑木林の中にある。

ウバメガシは手を入れて真っすぐに伸ばして、次の入窯を待つ。

窯からは白い煙が立ち、特有の匂いがたちこめている。原木に火を入れて今日で3日目、煙が白っぽくなり、やがて透明度のある紫煙色になる。生木の水分を抜く作業は約4日間、木を燃やすことなくいぶりながら徐々に炭化させていく。窯の入口はふさがれ、わずかな空気穴だけが残される。煙の色と匂いだけが手がかりという緊張の日々が続く。空気穴の調整が微妙な段階なので、今日は食事も窯の前で取っている。

山

炭には普通白炭と黒炭があり、備長炭は白炭。窯から出して火を消す時に「消し粉」という灰をかぶせるために炭は白くなり、これが火つきをよくする。備長炭は、ウチワで扇ぐと100



窯に火を入れて4日目。煙の色が透明度を増してきた。生木はそろそろ炭化に近づいている。（関さんの窯）

0度に、そのままだと400度にと火力が調整でき、火持ちがよい。火力が安定しており、匂いがない。上手に焼きながら魚や肉のアミノ酸を引き出すので、炭火焼きならではの旨味が出てくる。

備長炭の原木は硬くてタンニンの多いブナ科のウバメガシ。気候が温暖で雨の多い紀伊半島の山中には至るところに自生しているが、もともとは薪炭用に計画的に造林されたもの。しかし、戦後は杉や桧の造林で、自生地は山深い急峻な場所に多くなり、切り出しをして運び出すまでの作業が重労働になっている。

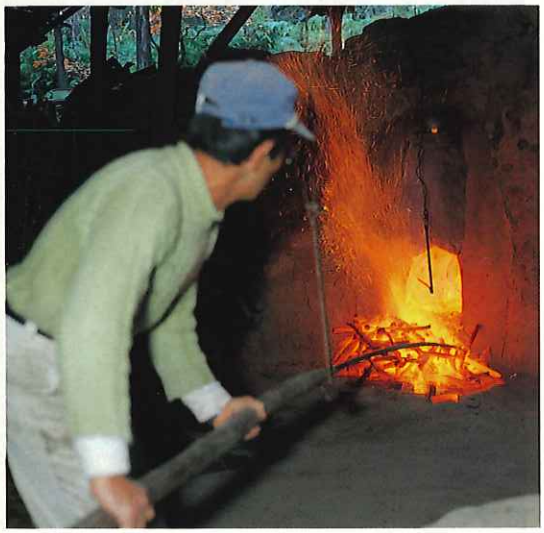
木は根元のところで切るが、そこから芽を出し20～30年たつと立派な成木になる。硬くてねじ曲ったウバメガシは用材としては不向きだが、薪炭用に活用、再生していくことで、山腹の崩壊を防ぎ、水源林の役目も果たしている。また炭は、最近、水質を浄化し悪臭を呼吸することから環境保全剤としての活用も注目されはじめている。

切

り出したウバメガシは半月以内に窯に入れないといけない。窯を効率よく、また姿よく焼くため、太い木は二～四つに切り、曲ったものは切り口に木片を入れて真すぐ伸ばし十数本づつに束ねる。

いよいよ窯入れ。火つきのよい松、クヌギなどで火をつけ、火まわりを確認してから窯口に粘土をはって、空気穴を細

主人の重要なアシスタント、奥さんの君子さん。



山のてっぺんからワイヤーロープを張り、谷間やその先の山からウバメガシを切り出して運び上げる。作業する潮崎衛さん（左の窯も）

くしていく。

もくもくと白い煙を出していた窯は約300度になり、次第に強い臭いを放って水分が抜けていく。この状態で約4日間。続いて小さな空気穴だけで三、四日間、完全に炭化するのを待つ。

煙が青く澄んできた。いよいよ「精煉ねらし」という作業が始まる。塞いでいた窯の入口をあけると、空気にふれて中の温度は一気に1400度に達し、まばゆいばかりの朱色の炎に包まれる。一本一本の炭が宝石のように真紅に輝いている。窯の周辺はもの凄い熱気で近づけないので、3mほどあるステンレスのえぶりというかき出し棒で慎重にかき出し、素早く灰をかぶせていく。約一日その状態で寝かせて冷えるのを待つ。

10日間に及ぶ作業が終わった。原木は約5分の1の大きさ、重量では10分の1の結晶になった。ほっとしながら、窯とその周辺をきれいに掃き清めながら、またあわただしく次の作業に入っていく。

山のてっぺんで原木の切り出しをする潮崎衛（まもる）さん（69）夫婦を訪ねた。急峻な谷間の7町歩を買い受けているが、とても足で歩いて行けるような場所ではない。森林作業のプロを二人雇って、ワイヤーロープを張り、それに取り付けて運び出す。主人はロープ巻取機の操縦、奥さんはレシーバーで作業員と連絡係、どこでも夫婦コンビの作業で成り立っている。

田んぼも畑も作っているので、農繁期には炭焼きは休むことが多くなった。炭焼き職人としては第一人者の潮崎さんだが、「後継者がいないので、あと四、五年で辞めることになるのかな」と淋しそうに語っていた。

潮崎さんの住む色川地区

森林公園&施設ガイド

宿泊や休憩もOK「ふれあいセンター」（青森県中里町）

8haの森林公園内には3棟のコテージ、バーベキューコーナー、遊歩道、広場等があり、地元産青森ヒバを使った「ふれあいセンター」には、60人収容の多目的ホールや大小の宿泊室（約28人収容）、研修室がある。コテージも宿泊が可能。宿泊料は、宿泊室が大人1500円、コテージ（4～8人）1棟6000円（食事代別）☎0173(57)2662

山の生活と文化をテーマに「やまびこ」（静岡県本川根町）

大井川源流のまち本川根町に平成5年4月にオープンした郷土資料館「やまびこ」は、山峡の生活と文化に焦点を当て、環境保全とエコロジー精神を訴えるもの。

大井川と林業のエリアでは、木馬を使って実物大で木材搬出風景を展示している。大井川鉄道井川線接岨峡温泉駅☎0547(59)3111役場企画課

木工とそば打ちを体験「クラフトの里」（愛媛県中山町）

小径木の有効利用と木のぬくもりを都会の人に味わってもらおうと「木工体験道場」等をオープンした。指導員のもとで、地元産のスギ材を使って自由に作品を作ることができる。研修無料、材料費小学生400円、大人700円。同敷地内には他に、「そば打ち体験道場」「ウッドクラフトセンター」、地元の果物、野菜で作った郷土の味「シャーベットハウス」などがある。JR松山駅からバス。☎0899(68)0756

ふるさと森林公園（島根県宍道町）

宍道湖を見渡す山の中に「ふるさと森林公園」がオープンした。木造のスイス風コテージ4棟に、木工品の展示館、クラブハウスがあり、林の中にはキャンプ場、テニスコートがある。JR山陰本線宍道駅下車☎0852(66)0113

各林業については、下記の林業労働力育成センターへ

全国林業労働力育成センター
〒101 東京都千代田区内神田1-1-12
全国森林組合連合会内 ☎03(3294)9711(代)

道府県	住所	電話番号
北海道	〒060 札幌市中央区二条西19丁目1-9	011-621-4293
青森	〒030 青森市松原1-16-25	0177-23-2657
岩手	〒020 盛岡市中央通り3-15-17	0196-54-4411
宮城	〒980 仙台市青葉区上杉2-14-46	022-225-5991
秋田	〒010 秋田市川元山下町8-28	0188-66-7421
山形	〒990-23 山形市蔵王成沢字町浦5385	0236-88-8100
福島	〒960 福島市中町5-18	0245-23-0255
茨城	〒310 水戸市三の丸1-3-2	0292-25-2021
栃木	〒320 宇都宮市西一の沢町8-22	0286-37-1450
群馬	〒379-21 前橋市上大島町182-20	0272-61-0615
埼玉	〒336 浦和市高砂1-14-13埼玉県林材会館内	048-822-5266
東京	〒190-01 西多摩郡五日市町館谷223-10	0425-96-2344
神奈川	〒243 厚木市旭町1-8-14	0462-28-1774
新潟	〒951 新潟市川端町2-9	0252-23-6491
富山	〒930-22 富山市八町6931	0764-34-3351
石川	〒920-02 金沢市東蚊爪町1-23-1	0762-37-0121
福井	〒910 福井市江端町20-1	0776-38-0345
山梨	〒409-38 山梨県中巨摩郡玉穂町極楽寺1214	0552-73-0511
長野	〒380 長野市大字中御所字岡田30-16	0262-26-2504
岐阜	〒500 岐阜市江川町27	0582-65-6621
静岡	〒420 静岡市追手町9-6県庁西館	054-253-0195
愛知	〒460 名古屋市中区丸の内3-15-16	052-961-9156
三重	〒514 津市桜橋1-104	0592-27-7355
滋賀	〒520 大津市におの浜4-1-20	0775-22-4658
京都	〒604 京都市中京区西の京樋の口町123	075-841-1030
兵庫	〒650 神戸市中央区北長狭通5-5-18	078-341-5082
奈良	〒630 奈良市内侍原町6-1	0742-26-0541
和歌山	〒640 和歌山市湊通丁南4-18	0734-24-4351
鳥取	〒680 鳥取市湖山町西2-413	0857-28-0121
島根	〒690 松江市母衣町55	0852-21-6247
岡山	〒700 岡山市岡南町2-5-10	086-222-7671
広島	〒730 広島市中区上八丁堀8-23	082-228-5111
山口	〒753 山口市駅通り2-4-17	0839-22-1955
徳島	〒770 徳島市かちどき橋1-41	0886-22-8158
愛媛	〒790 松江市三番町4-4-1	0899-41-0164
高知	〒780 高知市本町4-1-35	0888-22-5101
福岡	〒810 福岡市中央区天神3-10-25	092-712-2171
佐賀	〒840 佐賀市城内2-14-7	0952-23-4191
長崎	〒850 長崎市出島町2-11	0958-22-7124
熊本	〒862 熊本市神水1-11-14熊本県木材会館内	096-382-7872
大分	〒870 大分市大字古国府字内山1337-20	0975-45-3500
宮崎	〒880 宮崎市橘通り東1-11-1	0985-25-5133
鹿児島	〒892 鹿児島市山下町9-15	0992-26-9471

編集後記

●林業は自然保護派と、どうしてたびたび敵対することになるのだろう。白神のブナ原生林で「木を伐るな」と叫んだ自然保護派は、木を生え、木を育て、伐採することで生計をたてていく林業という営みと、原生林の保護樹林とをヒステリックに混同させてはいないだろうか。今回エッセイを書いてくれた森づくりの博士〝どろ亀先生〟の話を、両者ぜひ一読してほしい。

●「てぽら」4号のエッセイで安達生恒教授が、宮崎県諸塚村の国土保全森林作業青年隊の例を挙げ若者による森林作業員の育成の大切さと、過疎地のデカップリングは自治体が知恵を出しあえば可能であることを述べていたが、いま各地でこのような新しい試みがはじまり、志願する若者も出てきた。暗い杉林に少しづつ明るい光が射し込んできたと取材で感じた。(A)

てぽら
No.6('94春夏号)
発行日／平成6年3月15日
発行所／全国過疎地域活性化連盟
〒100 東京都千代田区永田町1-11-35
全国町村会館6階 ☎03(3580)3070(代)
編集協力・印刷／㈱ぎょうせい
■協力／(財)地域活性化センター
全国森林組合連合会・ふるさと情報センター

でぽら NO.6
平成6年3月15日発行
発行／全国過疎地域活性化連盟
〒100 東京都千代田区永田町1-11-35 全国町村会館6階 ☎03(3580)3070代

財団法人 日本宝くじ協会
宝くじ
宝くじの収益金は、
公共事業に役立っています。

夢みる奇跡。

宝くじがたどってきた道には、きっとたくさんの夢の足跡。

（本誌は、財団法人日本宝くじ協会の助成を受けて作成したものです）